

オウム真理教の研究

—科学と宗教の関係に関連して—

沼田 健 哉*

1. はじめに

オウム真理教事件は、長年新宗教研究に従事してき、かつ自分なりに宗教に心引かれるものを感じている筆者にとって、きわめて衝撃的な事件であった。すでに、オウム真理教に関しては、多くの著書や論文があるが、その全体像を捉えることに成功しているものは、ほとんどみうけられないといってさしつかえない¹⁾。

そのためもあって、当論文においては、可能なかぎり、オウム真理教の全体像を描くことを課題の一つとする。しかし、一論文であつかえることには当然限界があるので、当教団における科学と宗教の関係に焦点をあて、そのあり方を通して、いかなる要因により、ヨーガの修行グループとして出発した団体が、かくも恐るべき犯罪を犯すに至ったかという問題の分析を行ないたい。

その際、オウム真理教事件の背景をなす事象に関してもある程度ふれられないことには、十分な分析を行なうことはできない。しかし、一連のオウム真理教事件に関する判決文をみても、ほとんど新たな情報を得ることができず、筆者も日本国民の一人として、非公開の情報を提示することには、ある程度禁欲的にならざるをえない。そのため、ある程度の情報を有していても断定を控えた部分があることをまず断わっておくことにしたい。

以下、当論文においては、まず、ヴェーバーの宗教理論と他の研究者の神秘主義に関する研究について言及する。ついで、麻原彰晃とオウ

ム真理教の軌跡について述べた後に、オウム真理教の教義について検討を試みる。その後、当教団の組織と活動の形態について言及し、さらに、オウム真理教における科学と宗教のあり方を分析し、最後に、若干の全体的考察を試みることにする。

2. カリスマと神秘主義に関する研究

マックス・ヴェーバーは、カリスマに関して以下のように述べている。「『カリスマ』Charisma という表現は、ある個人のもつ非日常的 *außeralltäglich* な資質（それを現実にもっていようと、もっていると自称しているのであろうと、あるいは、もっていると誤り考えられているのであろうと、いずれでもよい）を意味する。したがって、『カリスマ的権威』*Charismatische Autorität* とは、被支配者が特定の個人 *Person* のそうした資質への信仰からしてみずから進んで服従するような、そういう仕方で行われるところの人間に対する支配（外面的な性質がつよかろうと、あるいは、内面的な性質がつよかろうと）のことなのである。」²⁾

この論述は、麻原と弟子や信徒との関係を分析する際に有効なものであるが、さらに、オウム真理教においては、種々の神秘体験が生じるような修行体系が確立されていた。これは、一種の「此岸における心的状態」であり、ヴェーバーによって、こうした状態は、以下のようなものとされている。「こうした状態はなんと言おうと、すべて明らかに、まずもって、そうした状態そのものが直接に信徒にあたえる感情的

*本学社会学部

1) 一番成功しているのは、島薮進『オウム真理教の軌跡』岩波書店1995年であるが、それでも欠如している部分は少なくない。

2) Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 3Bde., 1920-21. マックス・ヴェーバー、大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房1981年、86頁。

価値のために追い求められたのであった。……それらはディオニソスやソーマ〔蘇摩〕のような酒神礼拝の祭儀における宗教的なアルコール陶酔……古くから宗教的な意味をあたえられているハッシュ〔大麻〕、オピウム〔阿片〕、ニコチンの使用、またおよそあらゆる種類の呪術的陶酔とまったく同じものなのである。それらが特异的に聖化され、神的なものとなされたのは、その状態の心理的非日常性とそれによって条件づけられた独自の価値のゆえであった。……救済財なるものはなによりもまず、独自の宗教的（ないし呪術的）行為とか、あるいは方法的な禁欲または瞑想が直接にひきおこすところの状態、つまり、そうした感情的な心的状態そのものにはかならなかつたのである。〕³⁾

これは、オウム真理教の信者にとって、種々の方法によってひきおこされた神秘体験が重要な意義を持っていた事を考えると、注目すべき分析といえよう。しかし、ヴェーバーが述べているように、「ニルヴァーナに入ること、瞑想による神性との合一、オルギアないし禁欲によって獲得される馮神状態、これらは決してだれにでも到達できるという境地ではなかつた。また、もっと緩和されたかたちで、人びとを宗教的な陶酔状態あるいは夢幻状態に引き入れることが一般の俗間祭儀の目的となることもありえたが、これとて少なくとも日常生活の一部をなすものではなかつた。およそ宗教の歴史においては、つねにその発端から、人間の宗教的資質 *religiöse Qualifikation* の不平等性という重要な経験的事実がみられる……こうしたところからして、すべての強烈な宗教意識にあっては、カリスマ的資質の差別に応じて一種の身分的な分化を生み出す傾向が生じてくることになつた」⁴⁾のである。

この論述は、オウム信者の霊的ステージによる階層制の分析に関連しているといえよう。ところで、オウム真理教は、国家を相手にクーデタを企てるに至つたが、これに関連し、ヴェーバーは以下のように述べている。「戦争は、

ほかならぬ近代的な政治共同態の内部に、ある種のパトスないしは共同態感情を生みだし、それによって、戦士たちのうちに献身と無条件的な犠牲への共同感情を呼び起こすばかりでなく、さらに困窮した人びとへの憐憫から発し、しかも、原生的な諸団体のあらゆる障壁を突き破るような愛の働きをさえ、大量現象として出現させることになる。……さらにそれに加えて、戦争は戦士自身に、その具体的な意味づけとして独自の或るものを、つまり、死の意味とその聖化に関する戦士のみ固有な感情を賦与する。〕⁵⁾

オウム真理教においては、ハルマゲドンの際に、自分たちの多くは生き残るとしているが、一方では人間は必ず死ぬ存在であることを常に自覚すべきであると、麻原はくりかえし述べており、かつ麻原の最も好きな曲は「戦え！ 真理の戦士たち」であつた⁶⁾。この戦争のモチーフが、教団の凝集力を高めたものと推測される。

さらに、かつて仏陀は、出家集団を形成したが、オウム真理教が挫折するに至つた要因の考察においては、以下のヴェーバーの論述が参照に値する。「神秘論的な救いの追求はその意味するところからして当然に最強度の貴族主義、つまり宗教的救済における貴族主義とならざるをえない。それにまた、〔召命による〕職業労働へと合理的に組織されているような文化のただ中では、無差別主義的な同胞関係を培い育てる余地など——経済的に不安のない社会層以外——ほとんど存在しない。合理的文化の技術的・社会的諸条件のもとでは、仏陀とかイエスとか聖フランチェスコのような生き方は、外的な理由だけからしても、破綻するほかはありえないであろう。〕⁷⁾

オウム真理教の出家制度も、結局は破綻するしかなかつた。さらに、かつてある脱会した信者が、麻原を「人類の救済者なのか悪魔なのか分からない」と述べていたが、これに関連して、ドストエフスキーは、『カラマーゾフの兄弟』

3) 『同書』54～55頁。

4) 『同書』69～70頁。

5) 『同書』120頁。

6) 麻原彰晃『日出づる国、災い近し』オウム出版1995年。

7) マックス・ヴェーバー、大塚久雄・生松敬三訳『前掲書』160頁。

の中でドミートリイに以下のように述べさせている。「おれがどうしても我慢できないのは、美しい心と優れた理性を持った立派な人間までが、往々マドンナの理想をいだいて踏み出しながら、結局悪行の理想をもって終わるといことなんだ。いや、まだまだ恐ろしいことがある。つまり、ソドムの理想を心にいだいている人間が、同時にマドンナの理想をも否定しないで……心底から美しい理想の憧憬を心に燃やしているのだ。……大多数の人間にとっては、まったくソドムの中に美がひそんでいるのだ……美は恐ろしいばかりでなく神秘的なのだ……いわば悪魔と神の戦いだ、そしてその戦場が人間の心なのだ」⁸⁾

この内容は、麻原にもオウム真理教の幹部にもあてはまる部分があるといえよう。人類救済の理想を掲げつつ、彼らは多くの犯罪的行為も行なったのである。

ついで、神秘主義に関する古典的研究としては、ウィリアム・ジェイムズのものがあげられる。彼は、「意識の神秘状態」について言及し、以下の四つの標識をそなえた経験を、神秘的と呼んでいる⁹⁾。1. 言い表わしようがないということ。2. 認識的性質。——神秘的な状態は、知識の状態でもあり、真理の深みを洞察し、意義と重要さとに満ち、一種奇妙な権威の感じを伴なう。3. 暫時性。——神秘的な状態は、1時間か2時間が限度、しかし、再発のたびごとに、内面的な豊かさと重大さがますます強く感じられてくる。4. 受動性。——この意識状態が一度あらわれると、自分自身の意志が働くことをやめてしまった、あるいは、自分が、ある高い力によって掴まれ、担われているかのように感じる。その状態の内容の記憶がいくらか残り、その状態は、再発から再発までの間の当人の内面

8) 米川正夫『ドストエーフスキイ全集別巻・ドストエーフスキイ研究』河出書房新社1970年371頁。

9) William James, *The Varieties of Religious Experience. A Study in Human Nature. Being The Gifford Lectures on Natural Religion Delivered at Edinburgh in 1901-1902*, Longmans, Green, and Co. *Thirty-Second Impression* 1920. W・ジョイムズ、梶田啓三訳『宗教的経験の諸相下』岩波書店1970年、182～185頁。

生活を規定する。

さらに、インドにおいては、神秘的な悟りの修練は、瑜伽という名で知られ、個人と神性の合一の体験を指すとしている。これらの修行により、自分の低い天性の蒙昧を十分に克服した者は、三昧と呼ばれる状態に入り、「本能も理性も決して知りえないような事実と直面する」という¹⁰⁾。

ジェイムズは、神秘的な意識の一般的特徴として、全体的に見て汎神論的で楽観論的もしくは少なくとも悲観論的の反対であり、反自然主義的であり、別世界的な精神状態と、もっともよく調和すると述べている¹¹⁾。

ついで、アンリ・セルーヤは、神秘主義とは、理性を超絶しているように思われる何か崇高なものを暗示しているが、思想家たちにとっては、自己と絶対者との結合が現われる内面的な状態が神秘主義であるとする。すなわち、それは、人間精神と実在の根元との内密な、直接的な結合であり、神性の直接的な把握であるとする¹²⁾。

修行によって体得される神秘主義として、アンリ・セルーヤは、ヨーガをあげている。彼は、ヨーガは、人間の自律的な解脱を含む無神の宗教の神秘的な体系であるとし、ヒンドゥー教の神秘主義の最終の目的は、感覚的認識、あるいは思考のあらゆる対象から、自我を分離させることにあるとする¹³⁾。

10) 『同書』215頁。

11) 『同書』249頁。

12) Henri Sérouya: *LE MYSTICISME*. Ire éd., Presses Universitaires de France. 1956. アンリ・セルーヤ、深谷哲訳『神秘主義』白水社1989年10～11頁。

13) 『同書』144～159頁。

なおヨーガに関しては、以下の著書が参照すべき文献としてあげられる。

岸本英夫『宗教神秘主義——ヨーガの思想と心理——』大明堂1958年。

佐保田鶴治『ヨーガの宗教理念』平河出版社1976年。

佐保田鶴治『ヨーガ根本教典』平河出版社1973年。
佐保田鶴治『続・ヨーガ根本教典』平河出版社1978年。

番場一雄『ヨーガの思想——心と体の調和を求めて——』日本放送出版協会1986年。

Paul Masson-Oursel: *LE YOGA*, Presses/

アンリ・セルーヤは、神秘主義は宗教の領域に含まれるものであり、神性を対象とすると述べている。そして、諸々の麻酔剤が人間に恍惚感や無意識の状態をもたらすはするが、偉大な神秘家たちは、薬品を用いたりせず、人工的な恍惚感によっては、高度の真理は見出されないと結論づけている¹⁴⁾。これは、ニューエイジやオウム真理教において、薬品を用いていることの位置づけをする際に、参照すべき見解といえよう。

3. 麻原彰晃とオウム真理教の軌跡

麻原彰晃とオウム真理教の歴史については、すでに多くの研究者が述べているので、その中で、比較的重要と思われる事項を中心として論述を行なうことにする¹⁵⁾。

麻原彰晃（本名・松本智津夫）は、1955年3月2日、豊職人の家に男5人、女2人の兄弟の四男として生まれた。左目が緑内障で見えず、右目も視力が弱く、小学校のときから県立盲学

校に入学し、高等部を卒業するまで在学した。しかし、ある上級生が「目のほとんど見えない僕が投げるソフトボールを、彼はグラブで受け止めることができた。視力0.3、4はあったのではないか」¹⁶⁾と述べているように、弱視ではあったが全盲ではなかった。

麻原は、教科書も点字ではなく、印刷された「墨字」を使っており、成績は、中学部の頃は、理数系をとくいとして、トップクラスであったという。高等部では、成績は中の上であり、柔道と中距離走の選手であった。麻原は、努力家で勉強熱心であり、生徒会長に立候補したが落選し、柔道部でも、キャプテンの座を目指していたが、なることはできなかった。ある上級生は、以下のように述べている。「人の上に立ちたいと願いながら、周囲から推されたり認められてリーダーになることはできなかった。だからこそ一層、人を支配したいという願望が強くなっていったのではないのでしょうか。」¹⁷⁾

麻原は、劇好きであり、高校3年か専攻科1年の時に、文化祭の演劇で主役に抜てきされている。19歳の時、寄宿舎の年間行事の予算を決める自治会総会を、麻原は、いろいろ文句をつけて大混乱に陥れている。この件に関連し、ある卒業生は、以下のように述べている。「教祖になってから、テレビでケンカ腰の論争をしているでしょう。あの口調とそっくり。いっちゃん性格ば直っちゃおらん。」¹⁸⁾

盲学校卒業後の進路を考えるようになった麻原は、医師か政治家になることを目標とするに至った。熊本大学医学部を受験したが、試験の最終日に欠席したという。その後、麻原は政治家を志望するようになった。

75年、盲学校を卒業した麻原は、上京し、午前中は予備校に通い、午後は、都内の鍼灸院でアルバイトをするという生活を半年ほどしている。翌76年、九州に戻った麻原は、熊本市の鍼灸院でもアルバイトをしている。

Universitaires de France., 1954.

Micrea Eliade, *Le Yoga: immortalité et Liberté* (Paris, 1954)

岸本幸男『ヨーガによる人格変容』近代文芸社1995年。

Kovoor T. Behanan, *YOGA: A Scientific Evaluation*, 1964.

K. T. ベハナン, 石川澄子訳『ヨーガの科学的評価』平河出版社1986年。

Surendranath Dasgupth, *Hindu Mysticism* (London, 1927)

S. N. ダスグプタ, 高島淳訳『ヨーガとヒンドゥー神秘主義』せりか書房1979年。

14) アンリ・セルーヤ, 深谷哲訳『前掲書』160～164頁。

15) 以下の論述は主として以下の著書によっている。島蘭進『オウム真理教の軌跡』岩波書店1995年。

毎日新聞社会部『冥い祈り——麻原彰晃と使徒たち——』毎日新聞社1995年。

舛添要一『戦後日本の幻影<オウム真理教>』現代書林1995年。

下里正樹『オウムの黒い霧』双葉社1995年。

江川紹子『救世主の野望——オウム真理教を追って——』教育史料出版会1991年。

江川紹子『「オウム真理教」追跡 2200 日』文芸春秋1995年。

藤田庄市『オウム真理教事件』朝日新聞社1995年。

麻原彰晃『超能力「秘密の開発法」』大和出版1988年。

16) 毎日新聞社会部『冥い祈り——麻原彰晃と使徒たち——』毎日新聞社1995年, 34頁。

17) 『同書』37頁。

18) 『同書』39頁。

しかし、アルバイトをしながらの受験勉強も、いずれの大学にも合格できない程度の学力しか身に付けることができなかつたため、当然の結果として、東大受験は失敗した。このように、到底実現が不可能な目標を掲げて、それを達成しようと企てるのが麻原の特性の一つとしてあげられる。その行動形態は、最近にいたるまで基本的には変わっていないようにみうけられる。

その後、麻原は、77年千葉県船橋市内で鍼灸師として開業し、同年1人の予備校生と知り合い、翌78年1月に、結婚した。松本知子は以下のように述べている。「私にとってはすごく強引で、変な人だなという感じに映りました。しかし……尊師の人間性というところでは絶対裏切らない人だなという感じがあったんです。……何か普通じゃない、特別な出会いでした。しかも尊師は『これは前世からの約束だった』と言われるんです。」¹⁹⁾ これも、新宗教の教祖の結婚の際によく見られるパターンである。

78年7月、船橋市内で「漢方亜細亜薬局」を開業し、81年には、「BMA 薬局」と名称を改め、「風温精」「青龍丹」などと名づけた漢方薬を売ったが、店の目玉商品は、「やせる漢方薬」と称したものであった。82年に、麻原は、ミカンの皮などの原料を使って、「万能薬」と称する薬を作って売り、薬事法違反で逮捕され、罰金20万円を科せられている。

84年2月に、ヨーガ修行の会を発足させた麻原は、渋谷にヨーガ教室を開き、5月には、株式会社「オウム」を作り、事業に進出した。

ところで、麻原の初期における宗教体験について言及すると、77年、鍼灸師となった時に、自分は、何をするために生きているのかということを考え始め、絶対のもの、動じないものに対する模索を始めた²⁰⁾と記している。麻原は、自分の運命をはっきり知ろうとして、運命学の研究を、まず「気学」から始めた。ついで、「四柱推命」を終えた後は、台湾針灸と漢方・断易、^{いくじん}六壬、奇門遁甲、仙道の研究・修行を行なった。

麻原は、仙道の修行において、小周天・大周天という段階を修め、大周天により、クンダリーナの覚醒に81年に成功したと述べている。それにより、麻原は、幽体離脱、手当療法、霊障を見ること、他心通等の超能力を有するようになったと記している。後に否定するようになった霊障を肯定しているのは、興味深い事象である。

この頃から、宗教的なものにひかれるようになった麻原は、高橋信次の著書を読破した後に、中村元の『原始仏典』と増谷文雄の『阿含教典』にめぐり会い、高橋信次の仏教に関する記述が正確でないことを知ったという。

その結果、麻原は、いよいよ原始仏教の修行に入り、仏典を読み、瞑想したという。そして、この世のすべてが罪であり、自分自身が汚い人間だと知った時、涙が溢れて止まらなくなったと記している。この時点での自己認識が一番正確といえよう。さらに、自己犠牲の精神も学んだ麻原に、念力、因縁を知る、霊界の声を聴けるなどの新しい超能力も身についたという。

しかし、原始仏教においては、出家をしないかぎり修行の成就がありえないので、在家のまま解脱に至る方法を捜し始めた麻原は、布施の実践のためもあって、「阿含宗」に入会した²¹⁾。そして、千座行を終了したが、自分の煩惱が増大したと感じたという。その原因を麻原は、修行には、所作クラス、行クラス、智慧クラス、無上智クラスの四つの段階（クラス）があり、千座行は所作クラスの修行であったが故に、麻原にとってはレベルが低すぎたためとしている。

ついで、麻原は、『ヨーガ・スートラ』に出会い、『ハタ・ヨーガ・プラディーピーカー』、『ゲランダ・サンヒター』、『シヴァ・サンヒター』（いずれも佐保田鶴治訳）と教典をもとに独学で学んでいった²²⁾。そして、ついに、85年2月、「空中浮揚」を体験するに至ったという。このように、正規のグルについての修行をしていないことが、後に種々の問題を生ぜしめた要因の

19) 『同書』49頁。

20) 麻原彰晃『超能力「秘密の開発法」』大和出版、1988年110～111頁、以下同書による。

21) 阿含宗の側からの記述としては、桐山靖雄『オウム真理教と阿含宗』平河出版社1995年があるが、筆者の知るかぎりでは、実情は相違している部分がある。

22) 麻原は、ヨーガを学ぶ際に佐保田の翻訳書／

一つとしてあげられる。

ところで、この「空中浮揚」なる写真が、オカルト雑誌に載ると、若人を中心とする人々が、麻原のもとへと集まるようになった。

85年に麻原は、三浦海岸で、神から「神軍を率いる光の命」（アピラツケノミコト）に任命され、シャンバラ（理想郷）王国を築くよう命じられたという。さらに、同年、岩手県の五葉山へ行って、戦前の超古代史家である、反ユダヤ主義者・酒井勝軍のハルマゲドン説を知り、その影響を受けた²³⁾。

麻原は、86年3月、『超能力「秘密の開発法」』を刊行し、4月には、「オウム神仙の会」を組織し、7月には、インドに渡航し、ヒマラヤにて「解脱」の体験を得たという。12月には、『生死を超える』を刊行した。

87年2月、麻原は、インドのダラムサラに行き、ダライ・ラマと会い、そのことを後に権威づけに利用した。7月には、『マハーヤーナ』誌の刊行を始め、同月『イニシエーション』をも刊行し、会の名称を「オウム真理教」と改め、麻原は、「尊師」と呼ばれるようになり、より明確に新宗教の教祖とみなすべき存在となった。

88年2月、『マハーヤーナ・スートラ』を刊行し、大阪・名古屋・札幌に支部を、秋には富士山総本部を完成させた。89年2月、『滅亡の日』を刊行し、8月「真理党」を設立し、同月、東京都より宗教法人の認証を強引に取得した。そして、上九一色村などの土地の購入を始めたが、10月『サンデー毎日』誌の批判が開始され、同月「オウム真理教被害者の会」が結成された。さらに、11月には、坂本堤弁護士一家が失跡するという事件が生じたが、後に殺害されたことが分かった。

90年2月、衆院選に25人立候補したが、全員落選した。麻原は勝てると思っていたようであるが、これは、彼がいかに政治音痴で社会情況を把握する能力が欠如している人間であるかと

いうことを示している。この選挙の惨敗の結果、教団は危機的状況に陥り、その機会に乗じて某団体のメンバーが相当数教団に参入し、その後のオウム真理教の動向に影響を与えるに至ったという情報もある。

同年4月、麻原は、約1270人を引きつれて、「石垣島セミナー」を「オースチン彗星の影響で、日本に天変地異が起きる。今月中に日本は沈没する」という予言のもとに開催した。その際に、出家を半強制的に要請し、多額の資金を獲得したために、教団は再生しその後、財産管理をより徹底させ、出家を頻繁に勧めるようになった。

5月に、熊本県波野村に土地を取得したが10月には、熊本県警が強制捜査し、石井久子・早川紀代秀・青山吉伸らが逮捕された。

91年9月、麻原らは、「朝まで生テレビ」に出演した。92年3月、オウム真理教の信者300人が、モスクワに乗り込み、その後急速な教勢の拡大がみられ、6月にはモスクワ支部が開設されるにいたった。

なお、91年11月の信州大学を皮切りに92年10月からは、東北大学、東京大学、京都大学などの有名大学を含む各地の大学で次々と講演会を開催していった。その中で、近々、ABC兵器による世界最終戦争が起これ、大都市に壊滅的打撃が加えられることを予言した。

93年3月には、97年にハルマゲドンが起これと予言し、『麻原彰晃・戦慄の予言』を刊行した。7月には、『同第2弾』を刊行し、説法においても、「ハルマゲドン」や「サリン」という言葉が登場し、教団は、武装化への道を歩みはじめたとの印象を与えている。

94年1月、元信者の落田耕太郎を殺害し、3月には、仙台支部における説法で、「毒ガス攻撃による被害」を主張し始めた。6月27日には、松本サリン事件が起き、7人が死亡した。9月、宮崎県の旅館経営者が、営利誘拐、拉致監禁で、オウム真理教を告訴、告発した。

ところで、94年には、「白い愛の戦士」と呼ばれる計画が進められ、オウム真理教による軍事国家建設に向けて、国家との対決に備え、兵

、や、著書に相当依拠しているが、説いている内容には、大きな差異がみられる。

23) 舛添要一『戦後日本の幻影<オウム真理教>』現代書林1994年、29頁。

士を養成しようとしていた。9月には、某国で、オウム真理教の信者が軍事訓練を受けたとされている。

95年1月1日、読売新聞社が上九一色村でのサリン検出を報道した。2月28日、目黒公証役場事務長の假谷清を拉致・監禁し、後に殺害した。3月17日、在京マスコミ各社は、「3月20日の早朝、上九一色村のオウム施設に大規模な強制捜査が入る」という情報を入手した。同日、麻原彰晃から幹部に対して、正悟師昇格の「尊師通達」が出された。この時の22人の対象者の中には、地下鉄サリン事件の五被告も含まれている。

ついで、3月19日、大阪府警が退会希望の大学生を拉致監禁した容疑で、教団大阪支部を捜査し、信者ら3人を逮捕した。この件に関し、江川紹子は、「オウムを巡るトラブルの中で、今回の府警の対応は特異である。……親の言い分だけを元に一挙に強制捜査にまで入った府警の対応は性急な印象を拭いがたい」²⁴⁾と述べている。

3月20日午前8時すぎ、地下鉄サリン事件が発生し、死者12人、5000人以上が被害を受けた大惨事となった²⁵⁾。

22日、警察庁は、上九一色村など各地の教団関連施設を一斉捜査した。30日、国松孝次・警察庁長官が、自宅マンションを出たところを銃撃され、重傷を受けた。この事件の犯人に関する確証はなく、オウム信者による可能性もある。23日、南青山の総本部前で、村井秀夫が徐裕行に刺殺された。5月16日、上九一色村第六サティアンで麻原彰晃が殺人容疑で逮捕された。6月30日、東京地検と東京都は宗教法人法に基づき、オウム真理教の解散を東京地裁に請求した。9月6日、坂本堤弁護士一家の遺体が発見

されオウム信者による犯行であることが確認された。

10月、オウム真理教の解散命令が東京地方裁判所によりなされた。さらに、95年12月20日、公安調査庁により、オウム真理教に対する破壊活動防止法による処分に対する弁明の期日及び場所を、96年1月18日に、法務省別棟にて行なうことが告示された。そして、その弁明は、すべて終了した。

4. オウム真理教の教義に関する考察

宮坂宥勝智山伝法院院長は、密教学の権威として著名な研究者であるが、オウム真理教を混淆宗教の最たるものとして位置づけている²⁶⁾。宮坂は、オウム真理教は、宗教分類からすればヒンドゥー・ヨーガ瞑想系に属するが、原始仏教、アビダルマ仏教（部派仏教）、インド大乘仏教、極小のチベット仏教、タントラ密教の影響のあるヒンドゥー教、キリスト教の終末史観、すなわち「黙示録」のハルマゲドン、若干の中国思想などの、非体系的な寄せあつめ教義より成っているとす。

宮坂は、オウム真理教の出版活動に言及し、市販された刊行物を中心に教理を以下のように大別している。(1)原始仏教関係(2)アビダンマ仏教関係(3)大乘仏教関係（オウムでは、マハー・ヤーナとよぶ。）(4)金剛乗関係（秘密金剛乗、もしくは、ヴァジラ・ヤーナ、あるいは、タントラ・ヴァジラヤーナ、教本では、しばしば密教ともいっている。）(5)超能力関係（仏教の神通力の用語と超能力とを併用する。）(6)終末論、ハルマゲドン関係。(7)布教教化のための通俗一般書。(8)その他。

宮坂は、教本で麻原が説くところによると、(1)ヒーナ・ヤーナ（小乗）、(2)マハー・ヤーナ（大乘）、(3)タントラ・ヤーナ（金剛乗。密教）、(4)ヴァジラ・ヤーナ、(5)テラヴァーダ、があるとする。テラヴァーダは、いわゆる上座部仏教で東南アジアの仏教が該当するが、麻原に

24) 江川紹子『「オウム真理教」追跡 2200日』文芸春秋1995年、321頁。

25) なお、やや私事にわたるが、筆者は、3月20日午前8時すぎに上野駅で、ある人物を待っていた。「日比谷線が事故で不通です」という駅員の絶叫を聞いているうちに、日比谷線でやや遅れてきたその人物は、「事故のために遅れました」と筆者に語った。

26) 宮坂宥勝「オウム真理教とは何か——教理の実体について——」『仏教別冊 No.8 オウム真理教事件——宗教者・科学者・哲学者からの発言——』法蔵館10～42頁、以下同論文による。

よると、それには、(1)から(4)までのすべてが含まれているという。さらに、オウム真理教の修行段階には、(1)ヒーナ・ヤーナ、(2)マハー・ヤーナ、(3)ヴァジラ・ヤーナ、の三階梯があり、修行コースにしたがって、順次、精神的ステージが高められてゆくとされている。

宮坂は、麻原が秘密金剛乗を賛美していることから、オウム真理教はきわめて教義的には密教的であるとして、順を追いつつ、その教理を整理しながら検討している。

(1)原始仏教関係に関しては、『国訳一切経・阿含部』ならびに『南伝大蔵経』の原始仏教関係の経典を平易に現代語訳し、「特別教学システム教本」などでは、ジャータカ物語の輪廻転生にまつわる説話を紹介している。原始仏教＝阿含経典に基づく信者向けの著書も、いくつかあるが、これは、阿含宗の影響であろうと宮坂はみなしている。また、複数の著名な仏教学者の著書に学んでいることがうかがわれるとする。

(2)アビダンマ仏教関係に関して宮坂は、原始仏教の基本的教理をふまえながら部派仏教の煩瑣哲学を基調として、サーンキヤ哲学、ヒンドゥー教、インド後期密教などをミックスしながら、オウム真理教独自の教学体系の構築をもくろんでいるものとして位置づけている。

(3)大乘仏教関係に関しては、『マハーヤーナ・スートラ』〈大乘ヨーガ教典〉(88年2月)、『マハーヤーナ・スートラ PART 2』(91年5月)は、いずれも大乘経典と銘打っており、四無量心(慈・悲・喜・捨)などの若干の大乘仏教用語を駆使しているが、実際にはヒンドゥー・ヨーガを主軸とした内容であるとする。宮坂は、この種の著作を代表するものとして、『ボーディサットヴァ・スートラ 完全他力本願の道を説く』(94年1月)をあげているが、この菩薩経なるものは、主として、瞑想世界について書かれており、脳波や脳の構造の話が織り込んである。この著書で、語られている密教もヒンドゥー・ヨーガの修行方法が主たる内容である。『真理仏教六波羅密』(91年12月刊)は、大乘菩薩の実践行を現代風に解説し、コメントしたものである。オウム真理教は、六波羅密を、

ヨーガ修行に応用しており、『イニシエーション』(87年8月)には、その対応が明確に示されている。

(4)金剛乗関係については、オウム真理教には、サマディ、すなわち瞑想に関するいくつかの出版物があるが、宮坂は、麻原のいう金剛乗もしくは密教というのは、正当的な密教とは、ほとんど無関係のものであり、その実践修行は、ヒンドゥー・ヨーガの瞑想であるとしている。しかも、ヒーナ・ヤーナ→マハー・ヤーナ→ヴァジラ・ヤーナ(秘密金剛乗)という修行階梯を説いているのは、大乘仏教からヒンドゥー教のヨーガに移行するという奇妙な実践体系となっているとみなしている。

(5)超能力関係の著作は、きわめて多く、これに関して、宮坂は、オウム真理教の超能力開発はヒンドゥー・ヨーガを基本としており、麻原のいう超能力とは、空中浮揚・願望成就・透視・遠隔透視・テレパシー・他心通その他であると述べている。宮坂は、麻原は、超能力を売物にして信者獲得につとめたのであり、決して宗教的理想を実現する目的で超能力開発を説いたのではないことは、麻原のいくつかの著作のタイトルからも容易に知られるとしている。

超能力・瞑想・阿含経採用、チベット仏教指向など、いずれも麻原が阿含宗より学び取ったかあるいは再構想したものであることは、宮坂の述べているとおりであり、さらに、オウム真理教と阿含宗の最大の相違点は、オウム真理教が霊や霊障を全面的に批判し否定することにあるというのも、ほぼ正しい見解である。

(6)終末論・ハルマゲドン関係の出版物も、超能力関係について多く、宮坂は、ノストラダムスの予言と、『新約聖書』の「黙示録」の曲解に主としてよっているとみなしているのは正当な見解であろう。

宮坂は、オウム真理教の以下のような世界の三層構造の解説を紹介している。

○コーザル界……光優位のデータの世界。上へ行くほど透明な光が強くなり、光が情報として存在している。無始の過去から、はるかな未来に至るまでのデータが存在している。想念の

世界。

◦アストラル界……音（ヴァイブレーション）優位の微細な物質でできた世界。イメージの世界。

◦現象界……熱優位の粗雑な物質でできている世界。今現在我々が住んでいる人間界が含まれる。以上の教説は、オウム真理教の出版物にひんぱんに登場しているものである。

この三つの世界は、相互に連動しており、具体例をあげると、光でできたコーザル界のデータが、素粒子以上に微細な物質によりできているイメージの世界であるアストラル界に降りてくると、そこでのデータに対応するイメージが現われて、それが現象界に投影されて事象が生じるというのである。

このような世界観は、神智学の強い影響のもとに形成されていることはいうまでもない。麻原は、未来に起きる出来事を見ようとするならば、コーザル世界のデータとアストラル世界のヴィジョンをあらかじめみれば分かるとする。このような見解にもかかわらず、麻原の予言は、しばしばはずれている。

(7)その他に関しては、種々の信者向けの布教書があげられ、一般化は困難であるが、宮坂は、仏教の十戒を生活倫理として繰返し説いていることに強い印象を受けている。たとえば、不殺生に関しては、以下のように説かれている。「もし、生き物を殺さず、慈しむことができるなら、周りの人があなた方を好きになり、そしてあなた方も心穏やかになり、ね、そして長生きをする。で未来において天界へ生まれ変わるだろう。」（『願望成就の秘法』44頁）

これは、オウム真理教が、ゴキブリをも殺すことを禁じていながら、多くの人を殺害したという事実と関連させると興味深い教説といえよう。

さらに、宮坂は、教学システム教本のなかのいくつかの『ジャータカ物語』（現代語訳）にふれ、釈尊が過去の出来事を現在に結びつけ、「その時の誰それは私であった」と釈尊が語っているのを、すべて麻原にすりかえていることを指摘している。麻原は、自分は仏陀の再誕であると称している。

教本には、小乗の教え、中でも八正道・施、戒・生天論・四波羅夷などが説かれており、小乗、大乘、タントラのいかにかわからず、小乗の十戒を受持するのがベースであるとして、五戒・十戒を勧めている。部派仏教では、四預流支を強調し、四念処観や三界転生などを転釈している。大乘仏教では、とくに四無量心と六波羅密を中心に据えているとみなす。

オウム真理教の信仰対象であるシヴァ大神は、麻原により、「絶対自由、絶対幸福、絶対歓喜、マハー・ニルヴァーナ（大涅槃）にいる救済者の救済者」にして四無量心の具現者とされている。金剛乗では、クンダリーナ・ヨーガの成就が現世を超える修行であり、その終焉が最終解脱であると説いている。

さらに、オウム真理教の立場でポワをどう位置づけているかは、以下の麻原の説法により知ることができる。「すべてを知っていて、生かしておくと思いを積み、地獄へ落ちてしまうと。ここで例えば、生命を絶たせた方がいいんだと考え、ポワさせたと。この人はいったい何のカルマを積んだことになりますか。殺生ですかと、それとも高い世界へ生まれ変わらせるための善行を積んだことになりますかと。ということになるわけだよね。でもだよ、客観的に見るならば、これは殺生です。客観というのは人間的な客観的な見方をすれば。しかし、ヴェジラヤーナの考え方が背景にあるならば、これは立派なポワです。」（第10話、1989年9月24日、世田谷道場、77頁）

以上のように、オウム真理教の教理を全体的に検討して宮坂は、オウム真理教を単純に宗教として規定したり、オウム教団をたんなる宗教団体とみなすことはできないとする。しかし、実質がすでに在家仏教になっている日本の教団仏教に対して、本来の出家とは、布施とは、持戒とは、などというような仏教の最も基本的な、いわばその存立にかかわるような問題を鋭く突き付けたのが、オウム真理教であることもまた事実であるとしている。これは、仏教者としての反省をも含む論述といえよう。

以上の宮坂の見解は、密教研究者の立場から、

オウム真理教を位置づけたものであり、他に類をみないほど概括的なものである。それが故に検討の対象としたが、オウム真理教は、本来、シンクレティックな新宗教とみなすべきものであるから、種々の立場から異なる視点のもとに分析することが可能といえる。

ついで、宗教学者の永沢哲は、オウム真理教のユニークさを、科学と宗教的実践の融合に基づいた文明の方向転換の代案を、生と死の全体にわたる、ひとつの閉じた「真理」の体系として提示し、かつそれを具体的に、「生真面目に」実現しようとする道を選んだ点にあるとする²⁷⁾。

永沢は、麻原は、多くの問題を抱えた深化した世紀末をのりこえていくためには、人間の存在そのものと、社会・文明の革命が求められており、そのためには、「真理」に基づいた対抗国家として教団を組織していく霊的ボルシェヴィズムが必要と考えたとみなしており、宮坂よりは積極的な評価をしている²⁸⁾。

永沢は、オウム真理教は、大衆消費社会をラジカルに変革しようとする道を選ぼうとし、その「真理」の結晶化のプロセスにおいて核となったのは、グルとしての麻原と、彼が教えたクンダリーナ・ヨーガの身体技法を中心とする具体的な修行であったとしている。

永沢は、『超能力「秘密の開発法」』は、『生死を超える』とともに、麻原のクンダリーナ・ヨーガの体験と、そこから生まれたオウム真理教の修行のエッセンスをよく示しているものであるとみなしている。

『超能力「秘密の開発法」』の主張のポイントは、吸呼法と座法を中心とする瞑想修行によって、クンダリーナを目覚めさせ、身体の中央のエネルギーの経路であるスシュムナー管のなかを上昇させることによって、強烈な熱・快感・

神秘体験＝変性意識状態を体験するとともに、種々の超常的な能力を発現させることができるということである。そのための具体的な方法と、麻原の指導法が当書に書かれているとみなしている。

永沢は、この考え方は、インドを中心として発達した、ラージャ・ヨーガやクンダリーナ・ヨーガのものであり、クンダリーナ・ヨーガは、危険をはらんではいないが、スピーディーに心身に変容をもたらす密教の修行法として重要視されてきたものであると述べている。そして、そのクンダリーナの生命エネルギーの覚醒を説くという点においては、『超能力「秘密の開発法」』には、とくにオリジナルなものはないが、その内容には、ある種の生々しいリアリティーが感じられ、その背景には、かなりの激しい実際の修行体験があることが感じられるとする。

しかし、その一方では、粗雑で、乱暴な印象を与える部分も多く、プラーナーヤマ（呼吸法）についても、チャクラについても、説明は大まかであり、教え方も乱暴であるとしている。短期間で、どれだけ多くの能力やパワーを取り出すことができるかという、功利的な発想が、みうけられるというのである。

これに対して、『生死を超える』は、大きな変化を示しており、仏教の十二縁起と解説についてのきわめてオリジナルな考え方が含まれているとする。当書において、麻原は、十二縁起について、体験に即した生々とした解釈を与えると同時に、解脱に至るプロセスを、クンダリーナ・ヨーガの深化として統一的に表現しているという評価をしている。

そこで、麻原が示している解釈を、永沢はきわめてオリジナルでかつ魅力的なものとしてみなしている。麻原は、上座部仏教のなかには、座法と呼吸法の制御によって、クンダリーナを覚醒させるという修行法は見あたらないという常識を、クンダリーナ・ヨーガの体験から転倒してしまうが、それは、とてもオリジナルな思考のあり方を示しているとする。

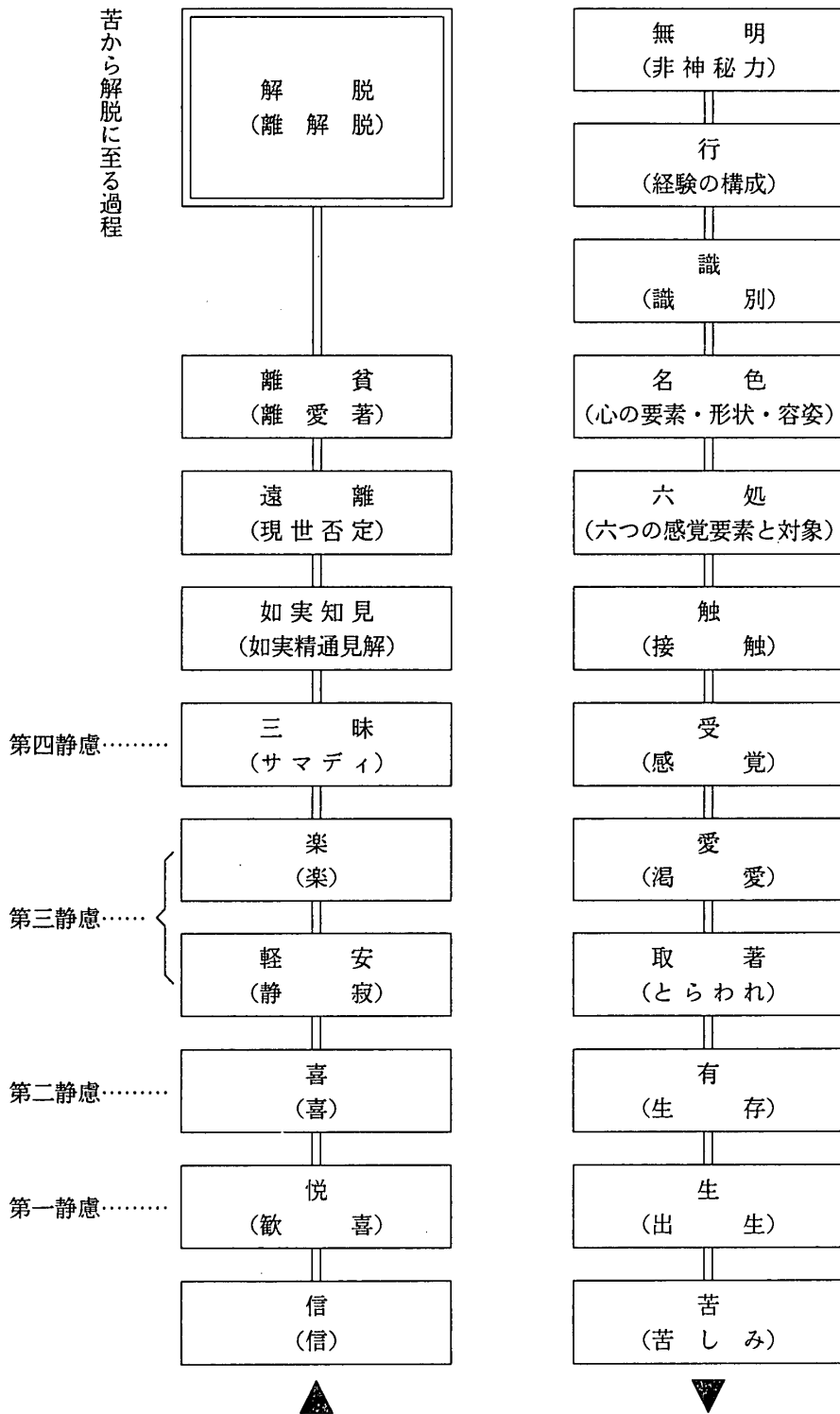
永沢は、さらに、この道程論は、八正道や止観の瞑想だけで、本当に解脱できるのだろうか

27) 永沢哲「わが隣人麻原彰晃——霊的实践における技術とポイエシス——」『imago (イマージ) 8月臨時増刊号第6巻第9号オウム真理教の深層』青土社、1995年、211～243頁、以下同論文による。

28) 麻原を革命家として捉えている立場のものとしては、芹沢俊介「『オウム現象』の解説」筑摩書房1996年が代表的なものといえよう。

苦から解脱に至る過程

十二縁起の法（十二条件生起の段階）



縁起の法（条件生起の段階）

()内は新しい訳語

十二縁起と解説への道の図「生死を起える」増補改訂版，麻原彰晃著，オウム出版刊，1992年より。

図 1

と考えていた仏教学者たちの疑問に、体験的根拠を与えてくれるように見えるという点においても、きわめて魅力的であるとする。

麻原は、さらに、シャーキャムニ・ブッダの教えを、インドのヨーガの伝統の中に位置づけなおすとともに、原始仏教の阿含経典についても、きわめて独自の解説を示して見せたという評価をしている。伝統仏教の修行形態や教学に不満を抱いていた、禅宗や真言宗等の宗派の僧侶が、オウム真理教に接近し、麻原の教えを受けた背景には、この「解脱」道程論が一つの理由としてはたらいていたと、永沢は推測している。

しかし、クンダリーニ・ヨーガによってもたらされる「楽」の境地のあとではいるとされる、「三昧」と「如実知見」の中身には問題があるとみなしている。『生死を超える』のなかで、二種類の「三昧」が説かれており、一番目は、「六種のヨーガ」であり、そのプロセスを、麻原は、チベット仏教の「ナローパの六法ヨーガ」にあてはめながら説明している。二番目は、「四つの記憶修習」と呼ばれており、「我が身これ不浄なり」「受は苦なり」「心は無常なり」「法は無我なり」という四つのテーマについて、瞑想していくものである。

仏教で「四念処」と呼ばれているこの瞑想について麻原は、サーンキャ哲学の概念で解釈し、この瞑想により、解脱したと述べている。しかし、永沢は、そこに貫かれているニヒリズムに疑問を感じている。本来、この瞑想は、根源的な自由と喜びと、慈悲の感情を生み出し、リラックスした、やわらかい心の状態を生み出すはずのものである。

ところが、『生死を超える』の「四つの記憶修習」では、実体としての真我の存在を前提にしたうえで、その真我とそれをまどわす心に生じてくる現象や観念・イメージを区別し、真我以外のものを、否定していくことに重点がおかれている。真我が、無に向かう力として、存在の作りなす世界を破壊する構造の中におかれているのである。

そのため、「真我」は、「真実」と「偽物」を明確に区別する二元論的な観念の力により閉じ

こもり、無の中に逃げこもうとして、かつそれがうまくできないでいるように感じられるとする。そのため、「偽物」の現象世界に対するニヒリスティックな破壊の衝動が生じ、そのため「存在が悪業を積む。人間もふくめて生きものは、存在している（生きている）こと自体が悪業の源になってしまう」という、ニヒリスティックな認識が生じる。これは、麻原の個人的体験を投影した異端的な見解といえよう。

かくして、『四つの記憶修習』は、二元論的な観念の作用を、強めるはたらきをしている。『生死を超える』の言葉は、ひどく一次元的なものであり、クンダリーニ・ヨーガの体験のあとで、概念の否定的なはたらきに、ふたたびもどっている。

『生死を超える』の修行道程の場合、インドやチベットのふつうのものと、順番が逆になっている。すなわち、クンダリーニ・ヨーガで「楽」の境地を体験したあとで、概念の否定的なはたらきによる「四つの記憶修習」にはいつていくようになっていく。そのため、自然成長的な心のポテンシャルを、ふたたびテンションのなかに囲いこみ、誤った概念＝論理機械へと生成させていく傾動がはらまれているとする。

永沢は、「四つの記憶修習」は、修行階梯において、クンダリーニ・ヨーガの「上」におかれるべきものではないかと考えている。「四つの記憶修習」があまり重要視されなかったのは、急速な成長を遂げた教団につきものの一つのエピソードかもしれないとみている。しかし、クンダリーニ・ヨーガの体験のあとで、言葉や概念の世界にもどり、麻原によって形成された「教学」の学習をするという道筋は、教団においてずっと維持されている。これは、本来的なヨーガのあり方ではなく、オウム真理教が新宗教教団とみなされるゆえんの一例といえよう。

オウム真理教において重要視されている、シャクティ・パットの問題点は、それが共鳴ないし引きこみを原理にしていることと、そこでおこっているできごとの中には、エネルギーを転送する側と、それによってクンダリーニが覚醒する側との能動・受動の関係がはらまれている

ことであるとする。

グルが、グルでありつづけるためには、ときに、弟子が抱えこんでいる重力を帯びた感情によりあらわれてくる鈍重な感情のエネルギーにひきずられることなく、その毒を昇華し、開かれた無限空間の中に溶かし入れていくことができなければならない。さもなければ、毒は、グルの心と体を傷つけ、その傷に苦しみ、カルマを昇華できないままにイニシエーションを与えれば、それを受けるものも、同じ苦しみや感情の毒をも吸いこむことになる。

永沢は、麻原は、弟子が急速に増え始めるとともに、この問題に直面したとみなしている。イニシエーションを多数の弟子に対して行ない、その反作用のため、混乱と動揺とエネルギーの低下におちいった麻原の心に、世間からのがれたいという強烈な「出離」の念がめばえ、さまざまな事物や弟子に対する執着が落ちた際におこったできごとを、麻原は、「解脱」と理解したものと推測している。

もう一つ重要なことは、麻原は、ジャクティ・パットが持つ意味について、「データ」という言葉で表現するようになっていたことである。永沢は、麻原のコーザル体の「データ」を転写することが、解脱への近道である、という考え方は、その後の教団の急速な科学技術への傾斜を、理論的に支えることになったとみなしている。ジャクティ・パットも、クンダリーニ・ヨーガも、生体に内蔵され、そのままでは発現してこない「秘密」に対する関心とかかわっており、麻原は、その「秘密」を「データ」のコピーという言葉で表現した。

永沢は、この考え方は、分子生物学と親近性をもっており、データを「波動」として取り出すことができるという発想は、量子力学や量子生物学からは、自然に生まれてくるとする。さらに、オウム真理教には、良質な教育ソフトを提供しているという、ビジネスの論理が忍びこんできたともみなしている。

出家が強調されるにつれ、「成就者」と「凡夫」、「グル」と「普通の人間」の区別が公然と主張されるようになる。こうして、ジャクティ

・パットの体験は、麻原の意識の中に、深い権威主義と差別と錯誤にいろどられた解釈を生んでいくことになった。そして、オウム真理教は、閉じた「真理」のために「役に立たせる」技術の論理によって支配された戦争技術＝霊的ボルシェヴィキへと変貌し、「救済」は「戦争」として理解されるようになったとする。このようにして、オウム真理教は、破滅への道をたどるにいたったとみなしている。このような永沢の見解は、宮坂と比較すると、より内在的に、ヒンドゥー・ヨーガの立場より麻原とオウム真理教の世界を理解しようとしたものとして位置づけることができよう。しかし、筆者は、麻原は、そもそも出発点から多くの問題点があったとみなしている。いずれにしろ、仏教やヨーガの本来的なあり方からは逸脱している部分が多いといえよう。

5. オウム真理教の組織と活動の形態

オウム真理教の本部と支部は、(図2)のような場所におかれていた。これを見ると、新宗教の多くのもと同様、都市に支部が多いが、総本部が都市部でないことと、小教団にもかかわらず、海外に支部を四箇所ももっていることが特色としてあげられる。とくに、ロシアには3万人を超える信者がいた時期があり、国内信者より多く、これは、他の新宗教教団において類をみない特異な現象である²⁹⁾。

また、総本部が山間部にあるのは、当教団の出家制度とも関連しているといえよう。ところで、オウム真理教は、一種の擬似国家の形態をとっていたが、その組織は、(図3)のようになっていた。教団幹部の学歴をみると、一流大学の理系が多いことがその特色としてよくあげられるが、杉浦茂のような文学部の出身者や中田清秀のような暴力団の出身者もおり、かなり多彩ともいえよう。

これらの幹部は、いずれも出家者であるが、彼らは、それぞれ、いずれかのステージに定められていた。ステージは、(図4)のように構成

29) その要因に関しては、亀山郁夫をはじめとして多くの人が言及している。

富士山総本部
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京総本部 03(5467)2745
〒107 東京都港区南青山7-5-12
マハーポーシャビル2, 3 F
世田谷道場 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5
杉田村松ビル1 F
杉並道場 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2 F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1
チサンホテル本館2 F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20
十全会ビル2 F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6 F
高崎支部 0273(46)1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町下稻荷前1081-5
船橋支部 0474(66)4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2
コスモ伊勢佐木長者町ビル204
藤枝支部 0546(46)2068
〒426 静岡県藤枝市築地堤下11-5
松本支部 0263(28)7429
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中央区栄5-8-14 万国ビル3 F
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20
ソフトオフィスビル2+4 2 F
福井支部 0776(26)6145
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2 F

京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町
384 松本ビル2 F
大阪支部 06(251)4264
〒541 大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15
マルイビル2 F
堺支部 0722(21)1843
〒590 大阪府堺市海山町4-168-9
和歌山支部 0734(24)2859
〒640 和歌山県和歌山市駿河町42
和歌山酒販会館2 F
広島支部 082(264)7252
〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
高知支部 0888(84)8286
〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
福岡支部 092(474)2877
〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15
第一渡部ビル6 F
那覇支部 098(866)9537
〒902 沖縄県那覇市安里2-4-12
嘉数グラビアハイツ5 F
深谷出張所 0485(74)8143
〒366 埼玉県深谷市萱場441-8

〈海外支部〉

ニューヨーク支部 212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York,
N. Y. 10017 U. S. A.
ボン支部 (0228)616647
Auf dem Hügel 48, 53121 Bonn, S. R. Germany
スリランカ支部 (AUM SACCA SANGHA ASSOC-
IATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka
モスクワ支部 215-57-02
1st Block, 21 Bld. Zvyozdnyi Boulevard Moscow
129085, Russia

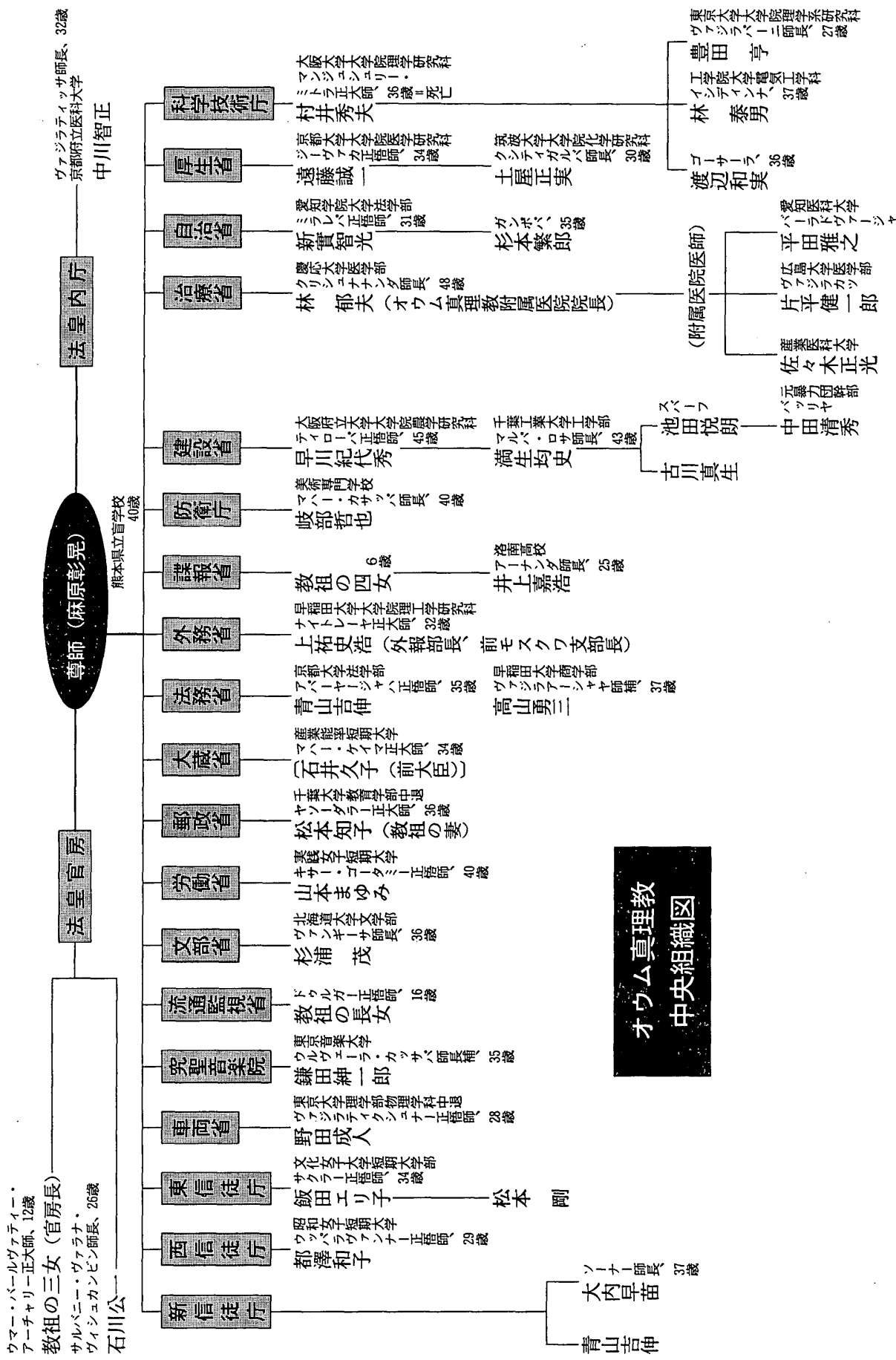
図 2

されていた。このステージとは、「心の成熟・
霊性の高さ」の度合いを示すもの、すなわち、
「いかに心が浄化され、心が強く、他の多くの生
命体を救済することに専心しているか」という
度合いを示すもの、とオウム真理教内部では説
明されている³⁰⁾。正大師は5人、正悟師は10人
前後であったとされるが、時期によって若干の
差異がある。これは、宗教的にみた、修行の進

み具合を示す尺度であり、それがそのまま教団
内における影響力を反映しているものではない。
麻原の一番弟子といわれている、大蔵大臣であ
った石井久子のステージアップの経過は、(図
5)のように紹介されている。

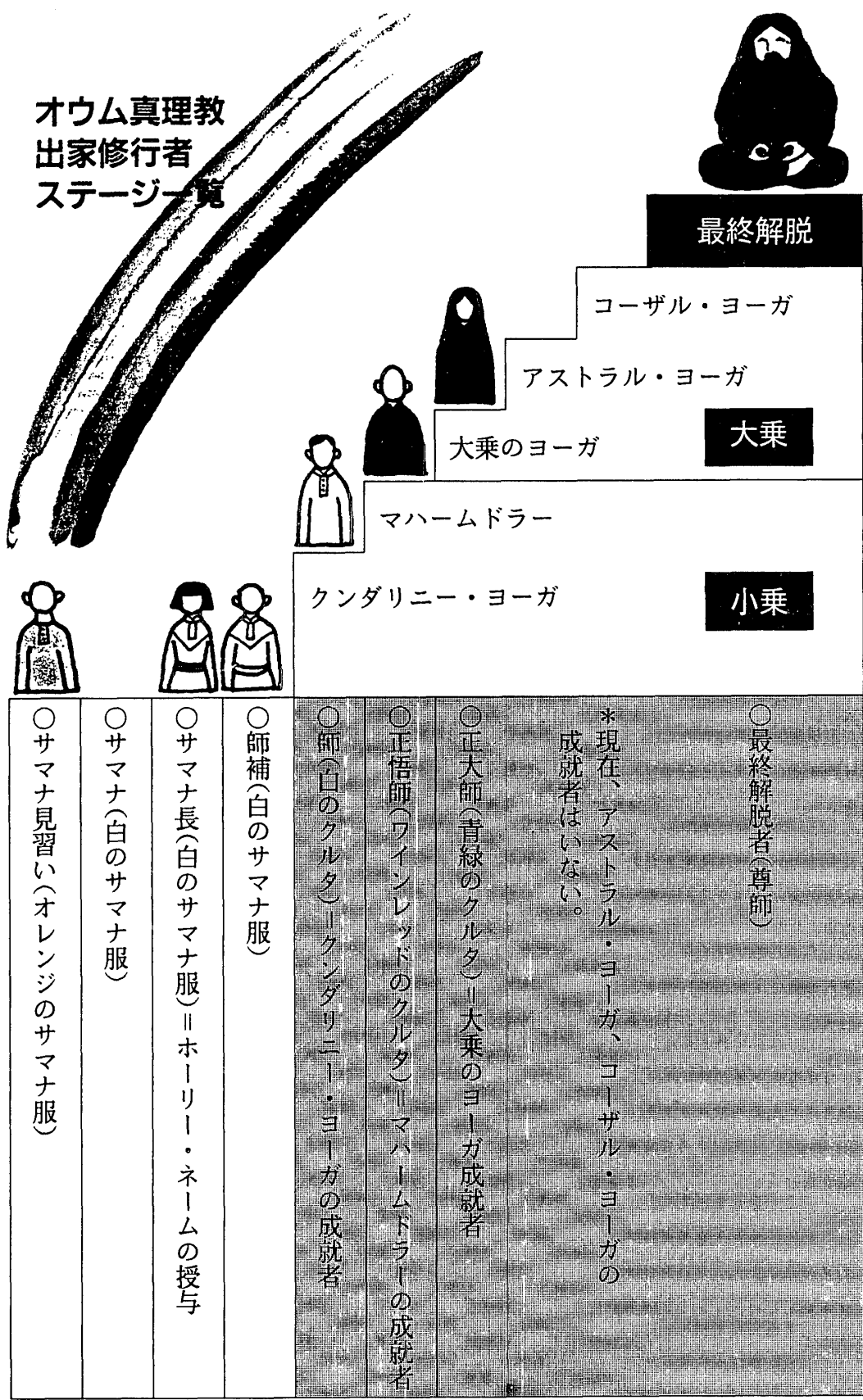
石井の場合は、いわばモデルケースといえる
が、早川のように正悟師であっても、実質的に
は、教団内 No. 2 の実力者とみなされている者
もいる。麻原は、最終解脱者として、ステー
ジの上でも圧倒的に優越した存在であり、早川、

30) AUM PRES 編『アヌッタラ・サッチャ No. 1』
株式会社オウム, 1995年9月, 10頁。



江川紹子『オウム真理教追跡2200日』文芸春秋1995年22—23頁。

図 3



AUM. PRES 編, 『アスッタラ・サックァ No. 1』 1995年9月, 11頁。

図 4

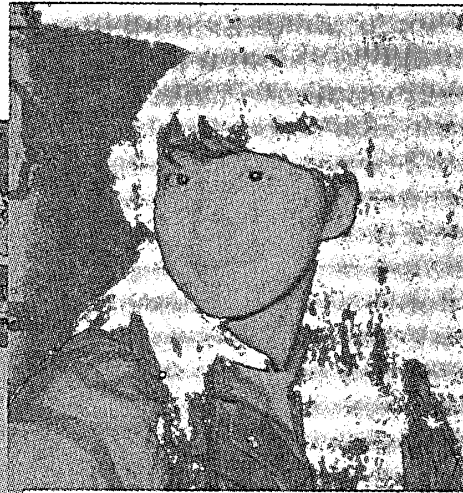
ステージ・アップの軌跡

精神性・霊性の向上＝ステージ・アップによって

人はどのように変わるのか。

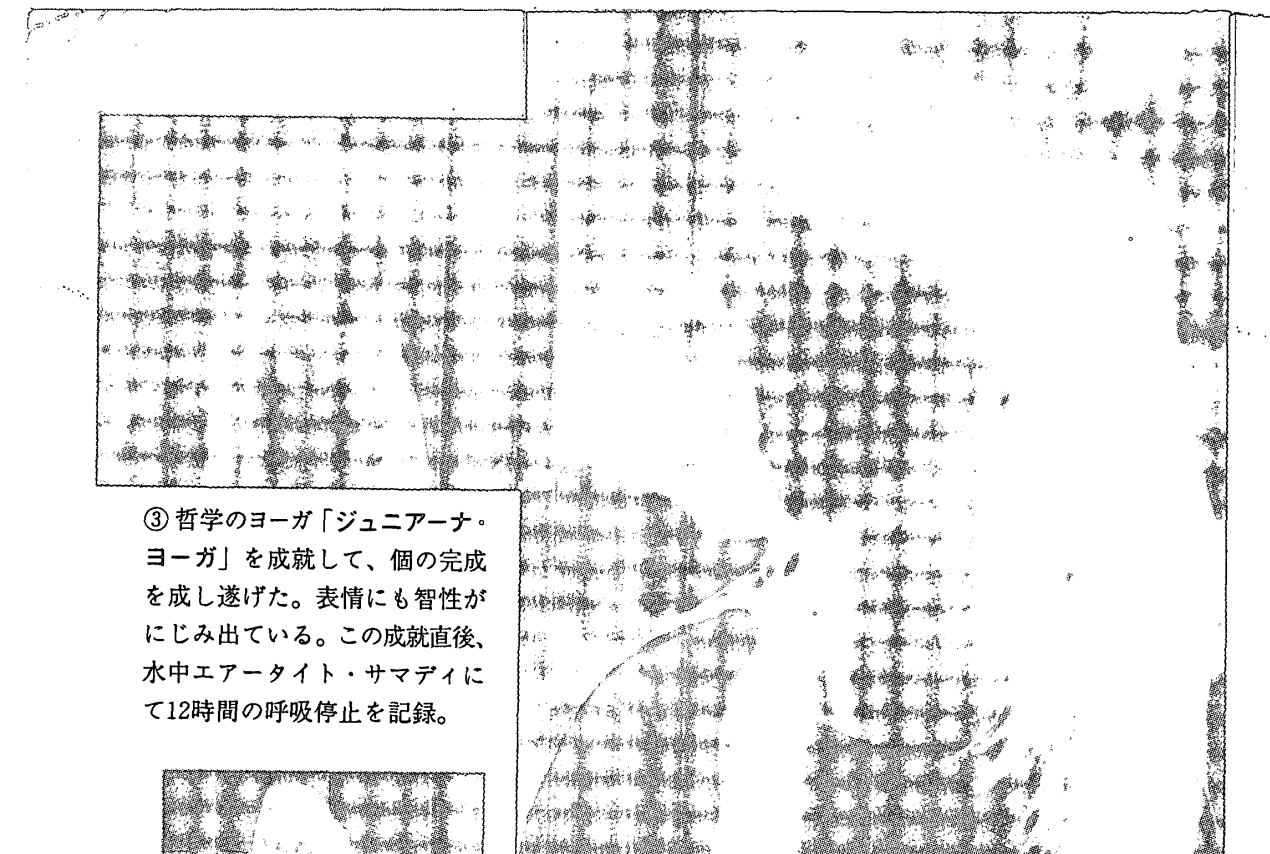
マハー・ケイマ正大師の場合は――

① ごくふつうの人だったマハー・ケイマ正大師。
心の成熟を求めて修行に入る。

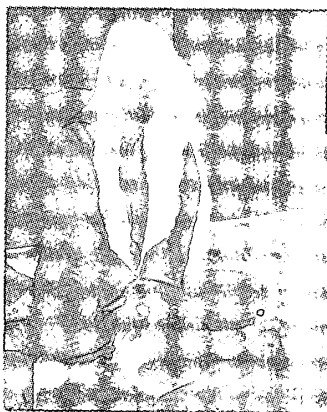


② 生命エネルギーのヨーガ「クンダリーニー・ヨーガ」成就。
非常にエネルギーッシュである。

図5 『アヌッタラ・サッチャ』

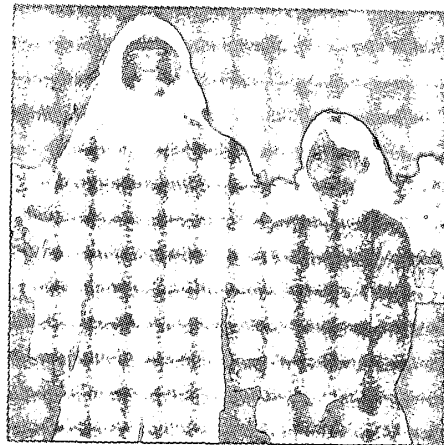


③ 哲学のヨーガ「ジュニアナ・ヨーガ」を成就して、個の完成を成し遂げた。表情にも智性がにじみ出ている。この成就直後、水中エアータイト・サマディにて12時間の呼吸停止を記録。



④ 自分だけが至福の境地にとどまるのではなく、人々に真の至福を与える大乗の道。人々の苦悩を我が身に背負い、想像を絶する苦しみに耐える。すべての人を至福に導くために。

⑤ 深い慈愛をたたえて——救済のため、さらなるステージを目指してマハー・ケイマ正大師の修行は続く。



村井、上祐らの幹部をも指導する立場にあった。

なお、正大師は、マハー・ケイマ(石井久子)、ヤソダラ(松本知子)、マイトレーヤ(上祐史浩)、マンジュシュリ・ミトラ(村井秀夫)、アジナーター・ウマ・パールヴァティー・アーチャー(麻原の三女)である。

正悟師は、ミラレパ(新實智光)、キサゴータミー(山本まゆみ)、ウッパラヴァンサー(都澤和子)、サクラ(飯田エリ子)、マパーヤジャハ(青山吉伸)、ウッタマー(村岡達子)、アーナンダ(井上嘉浩)、ジーヴァカ(遠藤誠一)、ティローパ(早川紀代秀)、アジタナーター・ドルガー(麻原の長女)、ヴァジラティクシュナー(野田成人)らがあげられる。³¹⁾

出家者の約4分の1を占めていたのは、科学技術省で、263人いたという。厚生省には、サリン製造の中心人物とされる、遠藤誠一と土谷正実がおり、それぞれ、ホーリーネームから、「ジーヴァカ棟」「クシティガルバ棟」と名付けられた個人研究棟を持ち、彼らが中心となって以下の物質の製造研究をしていた³²⁾。(1)サリン・ソマン・タブン・マスタード・VXガスなどの化学兵器(2) LSD・メスカリン・覚せい剤などの麻薬・覚せい剤類(3)自白剤にも使われるチオペンタールナトリウムといった麻酔薬。

自治省の任務は、施設の警戒警備と麻原の身辺警護を表向きとはしていたが、新実智光自治大臣の下には、殺人、尾行、拉致、監禁の特殊技能をもつメンバーが集中しており、こうした特殊技能者が、自治省と、事実上、井上嘉浩が中心であった謀報省の二つに集中していた。さらに謀報省、自治省、防衛庁、建設省、治療省の下に、中田清秀、松本剛、林泰男らによって構成されていた「行動隊」があり、非合法活動の実行部隊となっていた。

麻原は、「ヒトラーは政治的独裁者であった。毛沢東は思想的独裁者であった。そして私は君たちを最終解脱に導くために信仰的独裁者にな

ろうと考えている」と述べたという³³⁾。この発言を実現するべく、麻原は、省庁制のしかれた1994年夏以降、各省庁のトップ、特に「自治・新実」「建設・早川」「防衛・岐部」「謀報・井上」「治療・林」と「科学技術・村井」らを競わせて、より一層成果をあげさせようとした。

ところで、村井と早川は、麻原とオウム真理教にとって、きわめて重要な人物であったといえるが、この二人は対照的な存在であった。出家信者であった高橋英利は、村井に関して以下のように述べている。「グルへの絶対帰依、自らを空っぽにしてグルの意思で満たす、そうしたことが実際にできていたのは、オウム真理教のなかでじつは村井さんだけだったのではないだろうか。」³⁴⁾

これに対し、麻原は、早川をあまり信用せず、二人は互いに相手を探りあい、牽制しあっていたとみなしている。そして、早川に関しては、「人生経験があるぶん、組織内の力学というものをよく理解していたのだろう。オウム真理教のなかで唯一、政治的に振る舞うことを知っていた人のように思う」³⁵⁾と述べている。早川以外には、政治的判断ができる人物がいなかったのが、オウム真理教の実態であったといえよう。

高橋と同様に、捜査関係者も以下のように推測している。「村井は麻原の言うことを無批判に受け止め、何でもかんでも実行しようとする。これに対し、早川は大人だから、いい加減にしろ、という気持ちだったのでは。それで村井とはソリが合わなくなったようだ。……心はずでに麻原からも離れていたのでは。」³⁶⁾ 早川は、地下鉄サリン事件以前から、すでに、オウム真理教以外の組織と連動して、広範囲の運動を展開しようとしていたという推測もされている。

ところで、強制捜査後もオウム真理教は若干の変化を示しつつも存続していた。まず、比較

31) AUM PRES 編『マヌッタラ・サッチャ No. 0』株式会社オウム、1995年8月、98～101頁。

32) 毎日新聞社会部編『冥い祈り——麻原彰晃と使徒たち——』毎日新聞社1995年、161～162頁。

33) 舛添要一『戦後日本の幻影<オウム真理教>』現代書林1995年、42頁。

34) 高橋英利『オウムからの帰還』草思社1996年、115頁。

35) 『同書』154頁。

36) 毎日新聞社会部編『冥い祈り——麻原彰晃と使徒たち——』毎日新聞社1995年、87頁。

の後期のオウム真理教を知るために、1995年10月に発行された出版物により、オウム真理教の全体像をみることにする。それによれば、オウム真理教とは、「原始仏教および北伝仏教、原始ヨーガ等に代表される教え——つまり人間が正しい生活と修行によって豊かな心身を形成し、最終的には解脱・悟りという“本当の自由と幸福”を得るための教え——を研究し、実践している団体である」とされている³⁷⁾。

オウム真理教の修行者は、大きく二つに分けられる。一つは、通常の社会生活を送りながら教学と修行を続ける在家修行者であり、もう一つは、教団施設で暮らし、僧侶として修行を続ける修行者である出家修行者である。在家と出家の比率は、約10対1、通称として在家修行者を信徒、出家修行者をサマナと呼んでいる。サマナは、信徒の修行目的・修行進度に応じて適切な指導をし、信徒は、自分のペースに応じて課題をこなしていく。

在家修行の日々の実践としては、以下の大乘仏教の「六つの徹底」と呼ばれる修行法を取り入れている。

1. 布施、代表的なものとして次の三つの布施があげられる。財施……自分の財産を布施する。安心施……やすらぎを布施する。真理施……人々に真理の教えを広める。

2. 持戒、在家修行者のものとしては、次の五つが規定されている。不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒。

3. 忍辱、例えば他人にどんなひどいことをされても、あるいは肉体的、精神的に苦しみが生じようとも、じっと耐え、黙々と修行を続ける実践。以上の修行の達成により、ラージャ・ヨーガを成就することができる。

4. 精進、その具体的内容として、次の四つのものがある。○現在善業勤……現在行なっている善業を、よりいっそう増やす。○未来善業勤……未来においてより大きな善業を行なうことを決意し、実践する。○現在悪業断……現在行

なっている悪業を断つ。○未来悪業断……現在どうしても断ずることができない悪業を、未来において必ず断つことを決意し、実践する。

5. 禅定、以上の四つの段階を通過したのち、初めて本格的な瞑想修行に入ることができる。教団では、修行の目的に応じた種々の瞑想法を確立し、伝授している。

6. 智慧……以上の五つの修行の結果、心は透明になり、智慧を得ることができる。智慧とは外的な情報の枠組みを越えた本源的な情報を読みとる力である。すべての事柄において正しい判断をなすことができ、壊れない幸福を得ることができるのである。

ついで、在家・出家を問わず、オウム真理教の修行のバックボーンには、「四無量心」の思想と実践がある。四無量心は、四つの偉大な覚醒した心と呼ばれ、大乘仏教の根本をなす思想とされ、以下のような内容から成っている。

○聖慈愛、すべての魂を平等に愛する心。

○聖哀れみ、すべての魂の苦悩を哀れみ、救済する心。

○聖称賛、すべての魂の長所を称賛する心。

○聖無頓着、自己に生じるすべての苦楽に対して無頓着になる心。

ついで、「道場」は、サマナ、信徒に対しては、24時間開放されており、信徒は、次のような目的で道場を利用する。

○説法会等のイベントへの参加 ○教学・行法・瞑想修行 ○サマナ・成就者との面談 ○奉仕修行

さらに、教団の「目的」に関して、

オウム真理教では、発足当時から、「病苦からの開放」「現世的な幸福を与える」「解脱・悟りに導く」という「三つの救済」を掲げている。信徒たちの目的はさまざまだが、簡単に言えば、「真理の実践」に集約でき、その終局には、解脱・悟りという絶対的な至福の境地があり、六つの修行を徹底して実践することによって、在家でも到達することができる。

しかし、在家修行とは、さまざまな煩惱の中に身を置きつつ、真理を実践する道であるため、ある程度の幸福を得たいと思うなら在家でも充

37) AUM PRES 編『オウム真理教は現在——徹底初公開——その組織と理念、そして本音——』株式会社オウム1995年10月、8頁、以下同書による。

分であるが、解脱・悟りという絶対的な自由・幸福・歓喜・叡智を望む者には、出家修行が推奨されている。

出家主義者には、十の戒律と「聖なる十段階の道」の修行が日々の実践項目となる。

十戒は以下のような内容のものである。

不殺生……殺生・暴力をなしてはならない。

不偷盜……他人のものを盗んではならない。

不邪淫……セックスやオナニーなど、性エネルギーを漏らす行為を行ってはならない。

不妄語……嘘をついてはならない。

不綺語……意味のない言葉を話してはならない。

不悪口……悪口、乱暴な言葉を話してはならない。

不両舌……中傷、人と人を仲たがいさせるような言葉を話してはならない。

不愛著……愛著、貪りの心を持ってはならない。

不邪惡心……邪惡心、嫌惡、怒りの心を持ってはならない。

不迷妄……迷妄（真理を否定するような考え・思い）に陥ってはならない。

これらの戒を守ることによって修行が進むが故に、戒を守るよう努力すべきであるが、万一破ってしまった場合は、深くザンゲ（反省）をし、二度と同じ過ちを犯さないことをグルと自分自身の心に誓い、悔い改めねばならない。

ついで、「聖なる十段階の道」は、以下のような内容のものである。

正見解……真理の教えを学び、真理に基づいて世の中の諸現象を見る。

正思惟……正見解に基づいて、正しい思索をする。

正語……妄語・綺語・悪口・両舌の四つの口の悪業を離れ、正しく優しい、意味のある言葉のみを語る。

正行為……殺生・偷盜・邪淫の三つの身の悪業を離れ、正しい行為のみを行なう。

正生活……1日24時間すべてを真理の実践に変え、生活する。

正奮闘……自分のけがれた部分と闘い、すべ

てを真理の実践に変えることができるよう、努力する。「六つの徹底」の「精進の徹底」と同じ。

正記憶修習……真理の教えを繰り返して記憶し、心の深い部分に根付かせる。

正サマディ……正しくサマディ（瞑想の究極状態）に入り、真実を見極める。

正離解脱……正サマディまでの修習により高い智慧を獲得し、煩惱からの脱却、苦しみからの脱却を達成する。

正離解脱精通見解……正離解脱の達成により、常に真理を正しく見極めるための、あるいは衆生を救済するためのさまざまな神秘的能力を得る。

出家した者には、それぞれの能力や特質に応じてのワークが与えられるが、それは、奉仕修行としての功德を積む機会であるとともに、教義の実践の場としても重要な意味を持つとされている。サマナは、それぞれ与えられたワークを行ないながら、同時に教学・行法・瞑想などの修行を進めていくことになっている。

ついで、時期的には、海外支部が、ニューヨークとボンしかない時期の『新入信徒ガイドブック』によって、より前期の、オウム信者の活動をみることにする³⁸⁾。それによると、出家修行者を中心とする教団は、本支部活動として、修行法・各種相談に対するアドバイスをし、現代科学による神秘世界の探求を進めつつ、アニメ・マンガやふつうの書籍の編集出版、パソコン通信による真理の情報の提供、音楽活動、ダンス、オペレッタ、大説法祭などの幅広い活動を行なっている。

入信者には、信徒証、信徒手帳、新入信徒ガイドブック、タターガタ・アビダンマ第一誦本、その他の選択した修行体系に応じたセットが提供される。

入信者には、以下の三つの基本的修行体系が提示され、その中から選択できる。1. マハーヤーナは、現実生活をより豊かにし、幸福な人生を求める人、とくに、年輩の人、もしくは仕事か

38) 宗教法人オウム真理教『新入信徒ガイドブック——あたらしいあなたへの第一歩』。

忙しく時間の余裕のない人に勧められるものである。基本メニューは、①日々の修業②HOMA（ホーマ）③新聞の定期購読があげられている。

2. タントラ・ヴァジラヤーナは、行法、イニシエーションを中心として進められ、靈性を向上させ、神秘世界を実体験することを目指す。基本的メニューは、①日々の修行②タントラ・ヴァジラヤーナ瞑想体系③『真理』誌の定期購読があげられる。

3. テーラヴァーダは、真理にのっとして清浄な日常生活を送り、五蘊を浄化することによって、幸せな来世がもたらされるものとされる。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることも可能とされる。基本的メニューは、①日々の修行②教学システム③『仏典研究』誌の定期購読である。

さらに、先祖の救済を願う在家信徒のためには、「先祖救済制度」が設けられており、成就者の力によって、死者の魂を少しでも高い世界へ上げるために、「ポアシステム」も作られている。それは、「転生祭」、「ポアの儀式」「捨身祭」「納骨堂」からなり、次のような果報があるとされている。(1)解脱者と故人との間にカルマ交換が起こる。それによって、瞬間的に故人は、善業を身につけることになり、高い世界へ転生できる。(2)ポアされた人が出た家庭は真理との深い縁ができ、下の世界の道を閉ざし、上の世界に対して道を作る。

オウム真理教の修行体系のうち、道場で行なわれるものには、教学セミナー、到達真智運命魂の会、ビデオによる、「ナイスウィーク・オウム真理教」、「ベスト・リアライゼーション」、教学コーナーでの書籍や説法ビデオによる学習、説法会、シークレット・ヨーガ、清浄日、バクティと呼ばれる奉仕行等がある。道場から遠い人のためには、アットホーム真理、出張教学セミナー、アットホーム教学セミナー等の制度もある。

さらに、通信講座には、基礎瞑想セミナー、秘儀瞑想セミナーがある。それ以外には、能力覚醒コース、超越能力・能力覚醒セミナー、能力覚醒集中セミナー等がある。そして、イニシエーションと呼ばれる秘儀の伝授は、グルからの修行の「許可」という意味があり、愛のイニシエーション、シークレット・イニシエーション、火のイニシエーション、音のイニシエーション、火と音のイニシエーション、甘露水イニシエーション、等がある。

以上のように、きわめて多彩な活動が展開されていたことが分かり、種々の信者に対する対応が図られていたといえよう。そして、高いステージに達するためには、出家をする方がはるかに有利であるとされ、奨励されていた。しかし、とくに後期における出家者の生活環境は、道場とは異なり、非人間的な冷たい雰囲気であったと、多くの脱会した信者が証言している³⁹⁾。そこでは、クー・デタの準備まで行なわれていたのである。

6. オウム真理教における科学と宗教

6. オウム真理教における科学と宗教

広汎な視角から、科学者としてオウム真理教を分析した村上陽一郎は、まず、西欧に生まれた科学の前身は、キリスト教的な世界知であったとする。しかし、現在のわれわれの理解している科学的な知識と、キリスト教的な世界との間には、直接の関係はなくなったとみなしている⁴⁰⁾。

村上は、「聖俗革命」という用語により、18世紀に起こった、キリスト教的な知識体系を土台にしなが、しかも、宗教的な枠組みを剥ぎ取った新しい知識体系が生み出される過程を分析している。そこで起こった革命の真髄は、「神」から「人間」への移行という形で表現されている。このような西欧近代の試みは、図式的にいうならば、宗教の立場を捨てて、人間をすべての事柄の根拠とする立場への移行であった。

村上は、今回のオウム真理教事件で、最も衝撃的だったのは、ある若い新聞記者が、宗教というものが、良かれ悪しかれ、社会にとって無視できないものであることを、この事件で初め

39) 高橋英利『オウムからの帰還』草思社1996年。

40) 村上陽一郎「科学時代と宗教」『仏教別冊 No.8 オウム真理教事件——宗教者・科学者・哲学者からの発言——』法蔵館1996年、180～189頁、以下同論文による。

て学んだと述懐したことであったと述べている。村上は、オウム真理教の反社会性と考えるべきものは、「人間原理」に立つことにおいて初めて根拠を持つが、人間を超える何かを原理とするとき、必ずしも根拠を持たないと言わざるをえないとする。イエスの種々の行為自体が、人間には、生命や生活よりもはるかに大事なものがあつたことを、人々に気づかせるという目的に基づいていたというのである。

戦後日本社会における様々な宗教が、現世的な現象としては容認されながらも、人間存在に必須の一部として、まともに取り組みなければならない対象と見なすことを避けてきたということを、前述の新聞記者の述懐は、きわめて明確に示しているとみなしている。

村上は、近代ヒューマニズム社会では、宗教の機能に替わるべきものとして、科学がそれを果たしてきたという側面があることを指摘する。現代においては、科学が与える価値に満足や充足を感じることができない人々が奇異に映るという事実こそが問題であるというのである。

村上は、科学は価値に関わらないどころではなく、極めて強く「世界に生起するすべての現象を、《もの》の振る舞いとして記述する」ことを唯一の価値として主張する知識体系であるとする。したがって、科学が導く評価と選択に満足できない人々は、社会のなかで、不満足を補うことの正当性を、公的には、どこでも認められないという状況下に置かれているとみなしている。たしかに信仰の自由は認められているが、社会の成員にとって、宗教やそれを信じることや人間存在に対する意味に対して、社会が十分な配慮と考慮を示してきたとはいえないのではないかと、村上は主張したいようにみうけられる。

村上も考えているように、科学教が唯一の正当な宗教ともみなすべきものであり、それ以外は非正当的であるという社会は、やはり問題があるといえよう。オウム真理教事件は、このような問題を平均的な日本人に対して提起したといえ、我々もそれに対して真剣に考えるべきではなからうか。

ついで、環境倫理、人工生命等を研究テーマとしている佐倉統は、オウム真理教とその振る舞いは、決して特殊なものではなく、個々の要素のいくつかは、いかなる団体や個人にもみうけられるものであるとする⁴¹⁾。具体例をあげるならば、宗教の歴史とは、異端と他者を殺戮する、すなわち、「他者」を排除する歴史であった。宗教の重要な機能が、共同体の精神的結束を高めることにあつたが故に、そのような結果が生じるのは当然のことであり、この点において、オウム真理教の行為は、まったく宗教的な行為であるとみなしている⁴²⁾。

しかし、宗教のもつ悪い面が「すべてそろってしまった」点が、オウム真理教の場合、特殊であるとする。佐倉は、科学と宗教の関係に関して以下の四つの論点を提起している。第一に、宗教団体が科学的な営為に興味を持つのは不思議なことではないということ。第二に、科学者がオカルトを信じるのも不思議ではないということ。第三に、高学歴の知識人が大量殺人を犯すのも不思議なことではないということ。第四に、基礎科学の存在意義を、共同体間のコミュニケーション・ツールとして定位しなおすことは意義があるということ。

佐倉は、科学の歴史を見ると、元来、宗教と科学は同じものであつて、西欧近代科学は、キリスト教の活動の一部であつたと述べている。ついで、科学と神秘思想（オカルティズム）との関係に関しては、ギリシア時代から、西洋の伝統には、合理主義的な理解の仕方と神秘主義的な理解の仕方が並立しており、しばしばこの二つの仕方は、渾然一体となつて、独特の発展をしてきたという考えは有力なものとしてあげられるとする。

最近まで、科学と神秘は一体であり、自然科学が独立し、科学と宗教が分離し、対立するように広く扱われだしたのは、19世紀以降顕著となった現象である。自然を知ることが、自然科

41) 佐倉統「百年後、科学は社会を支える基盤たりえているか？」『同書』190～207頁、以下同論文による。

42) この問題に関しては、ルネ・ジラルドをはじめとして多くの研究者が言及している。

学の目的であるが、元来哲学の両輪であった存在論と認識論のうち、認識論の相対的な重要性の喪失という事態が生じた。

そのため、科学とは、人間の主観を排したものであるというイメージが今でも強いが、実は、西洋近代科学は、合理的認識論の申し子であり、神秘的認識論に基づくオカルティズムと科学は、宗教という母胎の中で渾然一体となっていた。したがって、オウム真理教が、科学活動を行なうことは不思議ではないとみる。

しかし、佐倉は、オウム真理教の場合は、ここ100年あまりの流れに逆行もしくは退行したものとみなしている。将来、科学が宗教を飲み込むことはあっても、宗教が科学を再び抱え込むことは、もはやありえないと考えるからであるという。オウム真理教は、宗教と科学の地位の「逆転」をねらったが故に退行現象とみなすべきであるというのである。この点に関しては、後に、オウム真理教の具体的事例にそくして考察することにするが、筆者は、逆転をねらったとは考えていない。

ところで、科学の世界から哲学的な問いが遠ざけられた結果、科学の発展の根本的な動機までもが失われつつあり、科学が科学的になればなるほど、科学をとりまく現状は、非科学的なものになっていくという逆説が生じているのである。佐倉は、中村桂子の「科学とは未知を既知にすることではなくて、既知に未知を見いだすこと」という発言を名言としているが、現在の科学は、神秘を探る知的作業というよりは、ルーチンワークとしての側面が強くなり、作業は極度に細分化し、専門化している。

上祐史浩が、宇宙開発事業団に就職しながら、わずか二週間で辞めた理由の一つは、研究のプロジェクトの課題が、上祐が生きている間には完成できないことが分かったからであるという。佐倉は、科学教育とは、人間に本来的に備わっているオカルトへの興味を、科学的な解明への原動力に転化することにほかならないとする。佐倉は、近代科学の方法論的な特徴は、その開かれた事実確認過程にあるとする。科学界における事実の提示の仕方、あるいは論理の展開の

仕方というのは、他人に分かりやすく、説得的なものであらねばならない。しかし、現状は、専門家は、非社会的な閉鎖集団に閉じこもり、責任の大きさを自覚せず、一方、一般市民は、無関心なため、専門家の暴走を許容する。閉鎖的な専門家と無関心な社会という図式が、大きな悲劇を生んできたとする。佐倉は、社会の中の科学であることを忘れないことが大切であり、オウム真理教事件は、科学が社会的な存在であることを忘れたときの恐ろしさを、示しているという位置づけをしている。

佐倉は、オウム真理教の一連の特徴は、宗教と科学の関係からすれば、特殊なものではないが、悲劇の構成要素が出そろったことを避けられなかった、戦後日本の社会的、教育的風潮に関しては猛反省が必要であり、そして、そのもっとも、効果的な改善策としては、科学を社会的インフラとして浸透させることが、まず第一になされなければならないことであるとしている。

以上の論をふまえて、村井秀夫の事例を若干検討することにする。村井は、かつて、オウム出版編集部のインタビューに、以下のように答えている。「自分が考えてきたのは……装置というか空間というか、そういうものを作って、大量に人を救い上げるというようなちょっと一味違った救済活動をするんじゃないかという、そんな自負とか、意気込みみたいなものがあつたんですよ」⁴³⁾

さらに、村井は、オウム真理教に入信当時、「就職してからもう5年目に入っていたんですが、矛盾といいますか、制約ばかりで、思ったことができないでいた。人間の幸福と全く関係ないことをしていてもだめだなと思った」⁴⁴⁾と書いている。そして、出家直前、大学時代の親友に、次のように語っている。「オウムでヨガの修行をしたい。人間の力で把握できるかどうか、わからないことがあるが、何千年の歴史の中で確立したヨガを究めてみたい。そうすれば、自然科学上のことも、今まで見えなかったことも、

43) 毎日新聞社会部『冥い祈り——麻原彰晃と使徒たち——』毎日新聞社1995年、72頁。

44) 『同書』72～73頁。

見えるようになるかも知れない。これは、ノーベル賞を取るのと同じくらい、意味がある。』⁴⁵⁾

そして、出家直後、阪大の天文同好会の先輩に、「麻原尊師の教えを基にし、人類が平和で幸福に生きていく世界を実現する手段を、科学的に研究している』⁴⁶⁾と語っている。さらに、宗教と科学に関して次のような発言をしている。「今でこそ宗教と科学というと全く別のもののようにとらえるかもしれませんが、実は、過去からの偉大な科学者——例えば、ニュートンにしる、アインシュタインにしる、非常に哲学的であったと。あるいは、むしろ宗教的でさえあったということはよく知られていることです」⁴⁷⁾ (『巨聖逝く』)

この発言は、前記のごとく、科学史では、ごく初歩的な常識にすぎないが、村井にとっては、重要な問題であったといえよう。さらに、村井は、東洋哲学を学ぶことによって自分が、新たな科学を形成することができるかも知れないと考えていたようである。これは、その可能性は否定できないが、成功するチャンスは稀なのである。

たしかに、ボーアは、易経の陰陽の哲学から、湯川は、老荘思想から、その新たな科学理論を提起する契機を得たが、これは、ヒューリスティックという、成功するとは限らない方法である。画期的な発見は、湯川やボーアやホーキングやイリア・プリゴジンのような天才によってなされ、有名大学の優秀な大学院生であるからといって可能なことではない。現代においては、一部の天才を除き、多くの研究者は細分化された領域に徹することによってのみ、わずかにしる科学の発展に貢献できるのであり、ふつうの研究者が大発見をなしうる可能性は少ない。それが故に、オウム真理教の科学者集団は、幻想の共同体とみなすべき側面もあったといえよう。しかし、現代の科学者集団のあり方に疑問を感じた点は評価すべきであろう。

ついで、科学社会学を専攻する鬼頭秀一は、

オウム真理教事件を、宗教と科学技術の関係を中心のテーマとして分析している⁴⁸⁾。鬼頭は、理学系研究科科学史・科学基礎論の大学院卒の研究者であり、自然科学に関して正確な専門的知識を有している。

鬼頭は、オウム真理教を分析して、これほど宗教が積極的に科学技術を取り込んだことは、初めてであろうとみなしている。鬼頭は、ニューサイエンスのブームの中で、彼らが既存の制度に縛られないような場で、宇宙論的側面にまで関連した研究をしたいと考えたのは、不自然なことではなかったとする。

鬼頭は、オウム真理教の科学者たちは、従来の近代科学の枠組を超えようとしつつも、科学の制度的なあり方に対して、思想的に無防備であったが故に、容易に、ハルマゲドンに対する科学動員のための新しい制度に絡み取られていったと分析している。しかし、このような事例は、ナチスの科学にも日本の七三一部隊にもその先例をみることができるとする。

鬼頭は、1980年代に出現した新新宗教は、実際の「土」などの実体的な自然とのつながりが希薄であったことが共通してみられる現象であったとしている。危機の回避は、より精神的な変革に求められ、その中で、「環境」や「エコロジー」が語られる場合でも、非常に観念的であったとしている。この点に関しては、一時代前の新宗教より、むしろ後退しているといえよう。さらに、精神的な変革を引き起こすために、ある意味では、反自然的な、薬剤や装置、技法を用いる傾向さえもっていた。鬼頭は、どのような社会的、文化的な状況で用いられるかが、「癒し」にとって決定的に重要であり、自然や他者とのつながり、さらには文化的、社会的状況の中という関係性の中で捉えることによって初めて、近代の枠組を超える可能性が生じてくるとする。オウム真理教事件は、科学技術や医学がどのように社会的に存立しているかに対

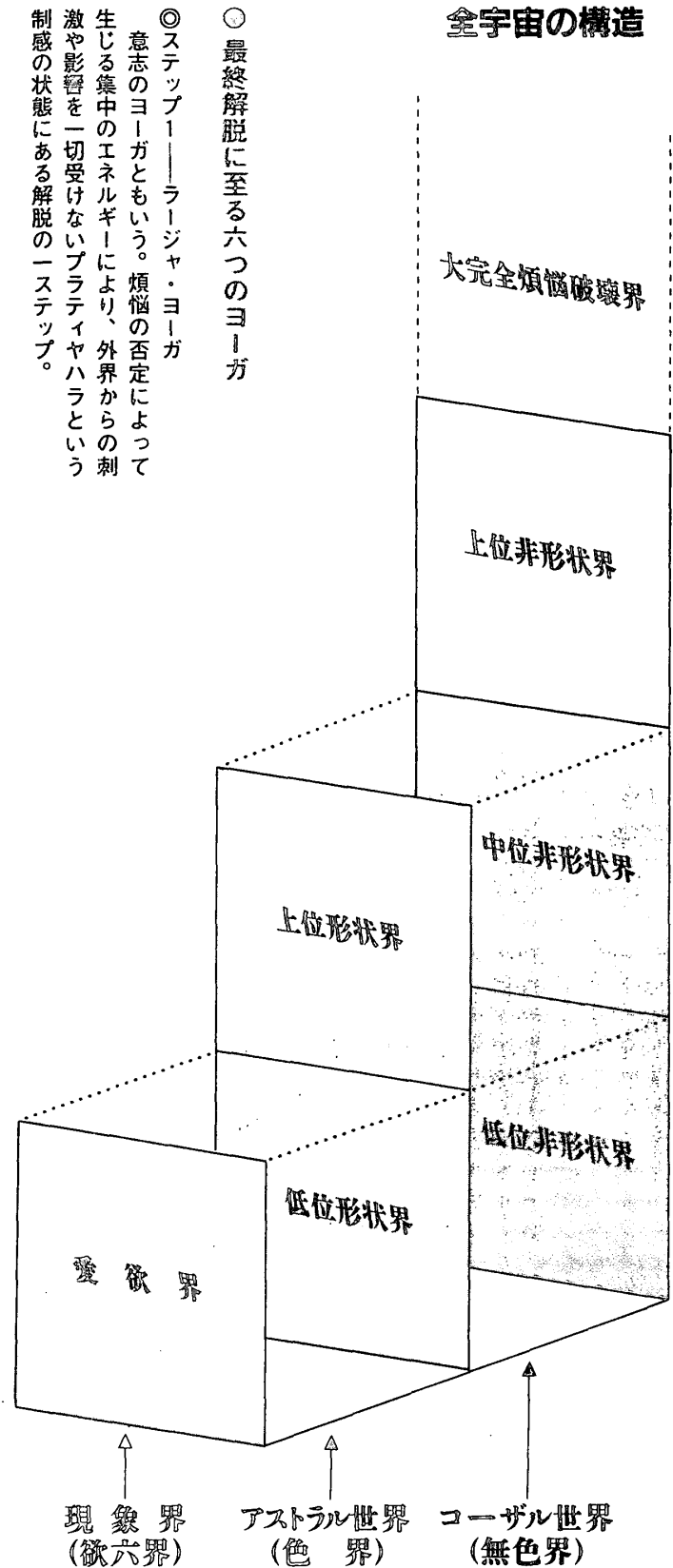
45) 『同書』73頁。

46) 『同書』74頁。

47) 『同書』74頁。

48) 鬼頭秀一「宗教と科学技術のねじれた関係」『仏教別冊 No. 6 オウム真理教事件——宗教者・科学者・哲学者からの発想』法蔵館1996年、208～221頁。

全宇宙の構造



◎最終解脱に至る六つのヨーガ

◎ステップ1—ラージャ・ヨーガ

意志のヨーガともいう。煩惱の否定によって生じる集中のエネルギーにより、外界からの刺激や影響を一切受けないプラティヤハラという制感の状態にある解脱の一ステップ。

◎ステップ2—クンダリニー・ヨーガ

エネルギーのヨーガ。尾てい骨に眠るクンダリニー・エネルギーの覚醒・上昇により煩惱を昇華し、安定した心状態を保っている解脱の一種。エネルギー・ロスがない限り、煩惱に左右されない状態にある。

◎ステップ3—ジュニアナーナ・ヨーガ

分析のヨーガ。物事をありのままに見つめる純粹観照智により、自らの煩惱を原因レベルにまでさかのぼって分解する。煩惱に全く左右されない解脱の状態。仏典でいうところの「供養値魂(阿羅漢)」を指す。マハー・ムドラールと同様のステージである。

◎ステップ4—大乗のヨーガ

三つのヨーガの成就をベースに、四無量心(慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無煩着)の実践により自他の区別さえ滅している解脱者。この大乗のヨーガが完成すると、この現象界に再生するカルマは消える。

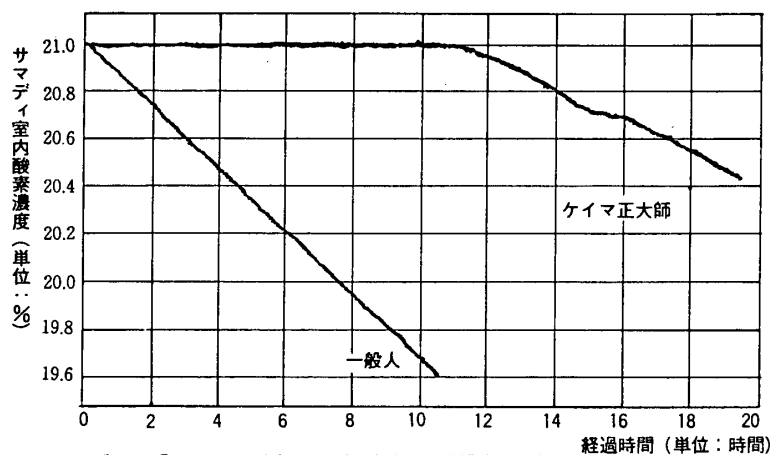
◎ステップ5—アストラル・ヨーガ

報身のヨーガともいう。現象界の裏にある純粹アストラル世界で活動する「報身」といわれる身体に自由に意識を移し変えることができる。アストラル・レベルでカルマを消滅させることができるので、この段階まで来ると、「魂の救済意欲」以外にはまったく執着がなくなる。

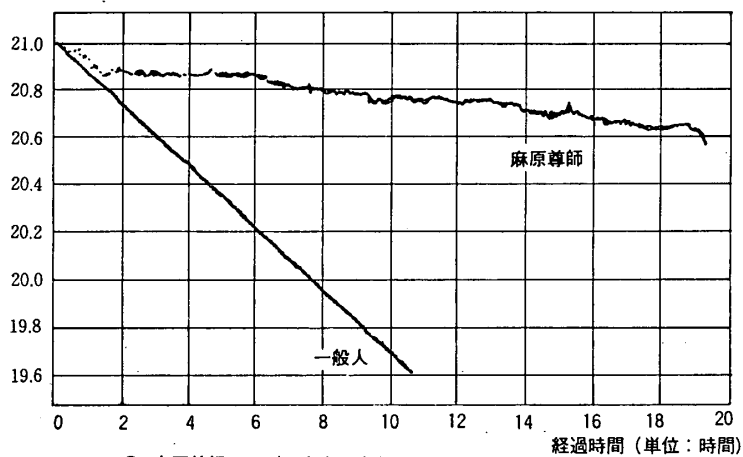
◎ステップ6—コーザル・ヨーガ

いわゆる真解脱の状態。純粹コーザルの世界で活動する意識だけでできた身体、「本性身」に到達し、コーザル・レベルでデータの入れ替えが行なわれる。すなわち、このヨーガの完成が再生される因を全く持たない最終解脱の状態である。ちなみに、コーザル世界まで到達するには最低三時間以上のサマディが必要とされている。

図6 『ザ・サマディ PART II』, 株式会社オウム, 27頁。



グラフ① ケイマ正大師サマディ室内の酸素濃度の変化
(1988年5月17日、静岡県富士宮市オウム真理教総本部道場)
装置の構成…サマディ室3×3×2.4m、実質内容積20.0ml



グラフ② 麻原尊師サマディ室内の実質酸素濃度の変化

図7 『ザ・サマディ PART II』, 株式会社オウム, 29頁。

● ニルヴィカルバ・サマディの証明

さかのぼることおよそ三年前、麻原尊師は静岡県富士宮市のオウム真理教富士山総本部道場敷地内において、愛弟子のマハー・ケイマ正大師と水中に用意された二十七立方メートルのチェンバーでやはり解脱者の証明をすべくサマディの実験に挑戦された。

実験そのものはチェンバー内から発生する有毒ガス、あるいは直前に内部をストープで乾かしたために水槽そのものが酸素を消費するハブニングなどがあり二十時間ほどで中止せざるを得

得なかったが、補正されたデータから麻原尊師の驚異のサマディの成功が証明された。一方、愛弟子マハー・ケイマ正大師も十二時間連続無呼吸を記録。解脱者の証明を果たしている。

ちなみに、このとき麻原尊師は、サマディの最中に頻繁にインターホンで酸素消費等のデータ確認のために外部と連絡を取っていた。「なぜサマディに入っているのにできるの？」と思議に思った方も多かったが、まさしくこれが呼吸停止のまま、肉体を動かしたり話したりすることが可能となる、ニルヴィカルバ・サマディの証明だったわけである。

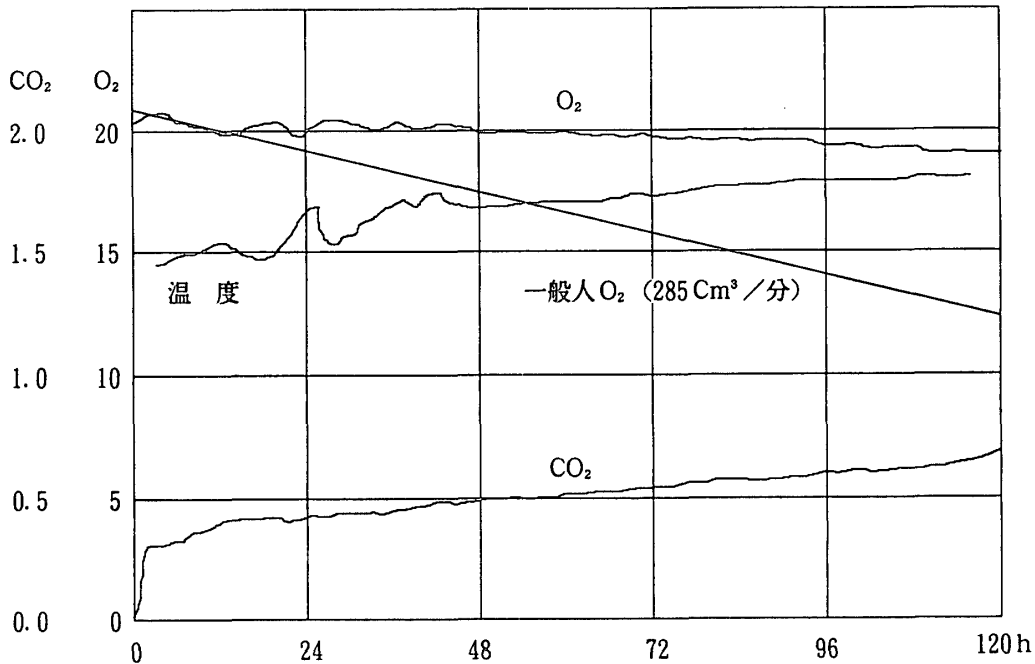
する深い本質的な洞察を欠いたまま、他の枠組に安易に依拠しようとした結果生じた事件であるとみなしている。以上の三者の考察を参照しつつ、以下、オウム真理教における事例をみることにする。かつて、マイトレーヤ正大師・上祐史浩が、アンダーグラウンド・サマディにいどんだ記録を含む本のあとがきは、以下のような内容である。「宗教は科学である——これはオウム真理教の基本的スタンスの一つである。そして、科学である以上、一つ一つの教義についても科学的な実証をなさなければならないのはいうまでもなく、それが今回の“解脱”を実証するアンダーグラウンド・サマディの意味合いでもある。……ただ、ここで考えていただきたいのは、思い込み宗教が与えるこうしたイメージはむしろ“信仰”というものの弊害部分で、正

確な史実を見ても明らかのように、本来、宗教は極めて実証的なものなのである。サキャ神賢（釈迦牟尼）の原始仏教、そして偉大な成就者たちによって伝えられた原始ヨーガの教えしかり、信仰の背景には思い込みからくる“狂信”ではなく、必ず証明が存在していた。……ブームを越えて大衆が本物を求める来るべき時代、皆さんが本物の宗教を選択される上で、本書がその一助となれば幸いである。」⁴⁹⁾

サマディとは、サンスクリット語で死の状態を意味するが、オウム真理教においては、全宇宙の構造と、最終解脱に至る六つのヨーガは(図6)のようなものとされている。

49) オウム出版広報編集部編『ザ・サマディ PART II——実録・アンダーグラウンド・サマディ1991』株式会社オウム1992年、70頁。

グラフ1 酸素濃度・二酸化炭素濃度表



*酸素濃度、二酸化炭素濃度とも補正後の数値。なお、酸素については当初、電気ストーブをつけたり消したりの状態に変化が激しく、温度補正を行なったが数値にばらつきが出てしまった。

表2 酸素濃度とそれに伴う症状

空気中の酸素濃度 (%)	症状
18.5	頭痛、不安、呼吸・脈拍増
16.1	視力障害、意識混濁、吐き気
13.9	筋けいれん、墜落、呼吸困難
11.5	顔面蒼白、意識不明
9.2	昏睡、8分で死亡
6.9	呼吸停止、即死

*今回サマディを行なった場所は高地のため、単位体積中に含まれる酸素分子の数は標高0メートルの場所の87%。その点を考慮してここでの数値は会場の条件に合うように換算されている。

表1 マイトレーヤ正悟師と一般人のサマディ室内の酸素濃度変化比較

経過時間 (時間)	マイトレーヤ正悟師 (%)	一般人 (%)
0	20.9	20.9
24	19.9	19.1
48	19.7	17.4
72	19.4	15.6
96	19.2	13.9
120	19.0	12.1

*一般人は座っているときの酸素消費量を285 Cm³/minで計算。

図8 『ザ・サマディ PART II』21頁。

サマディの科学的な定義としては、「完全なる呼吸停止と完全なる心臓の拍動停止の状態」を指すというものと、「完全なる呼吸停止と心臓は微拍動している状態」を指すというものがあるが、現代のインド・ヨーガ研究では、後者が正統とされているとする。ジュニアナ・ヨーガで超覚醒のサマディに至るわけであるが、

それが二つに分かれたものが、サヴィカルパ・サマディとニルヴィカルパ・サマディである。

サヴィカルパ・サマディというのは、自分が、この世に生きているという意識が存在したままで、我々の住む現象界の裏側にある世界へと意識が飛んでいる状態である。このとき、呼吸や心臓は完全に停止し、肉体は仮死状態となる。

いわゆる「死後涅槃」に達するものとされる。

これに対して、ニルヴィカルパ・サマディの場合は、意識そのものが既に涅槃の状態にあり、呼吸停止のまま、肉体を動かしたり、話したりでき、いわゆる「現世涅槃」といわれる状態である。上祐史浩の場合は、サヴィカルパ・サマディの状態の実験だが、麻原は、ニルヴィカルパ・サマディにより、解脱者の証明をしたとする。その証明は、(図7)のグラフによって明示されているという。

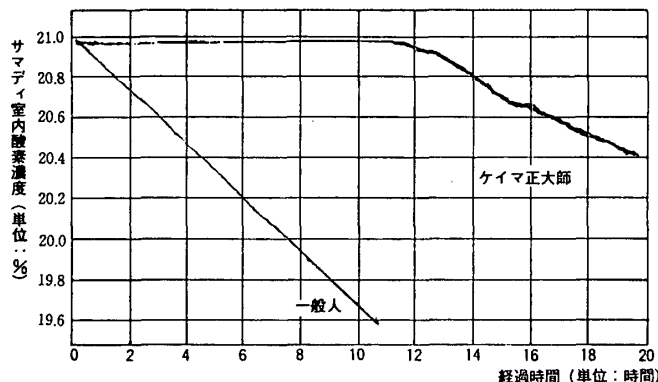
これに対して、1991年11月17日から上九一色村でマイトレーヤ正悟師(当時)によって行なわれた、五日間にわたる、アンダーグラウンド・サマディの計測データにより、解脱者は、常人を超えた、スーパー・パワーの持ち主であることが証明されたとする。(図8)のグラフと表は、その計測結果であるという。

しかし、サマディの実験には先例があり、マイトレーヤに先だって1988年5月17日、富士宮市のオウム真理教総本部道場敷地内で、麻原彰晃とマハー・ケイマ正大師によって、水中エアータイト・サマディが行なわれたのである⁵⁰⁾。その結果、ケイマ大師の酸素濃度は、12時間21パーセントで変化がほとんどなかったのに対し、麻原の方は減りつづけたのである。しかし、これは、麻原の水槽は無人の場合でも酸素濃度が減少していることが分かった。その理由は、酸欠状態になった木材が酸素を消費していたためとする。そして、(図9)の表のように、酸素濃度の自然減の部分差し引いてみると、麻原も順調にサマディに入っていたことが分かるとしている。この論述からも、この実験は、きわめて杜撰なことが分かる。また、座禅やヨーガを行なう者の脳波がふつうの人間と違うパターンを示すことはすでに証明されているが、当教団でもそれに言及している(図10)。

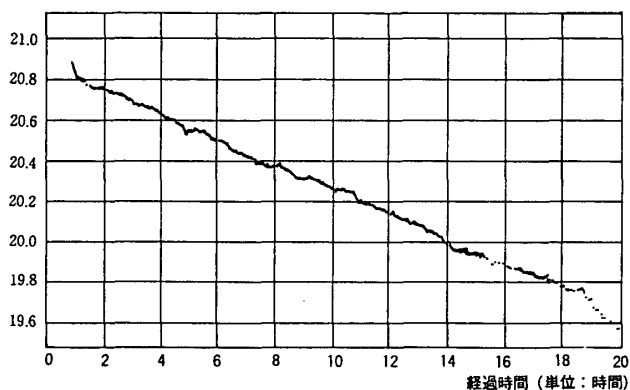
この事象を証明した例として、村井秀夫が正悟師であった時の脳波の記録も残されている(図11)。

さらに、地下鉄サリン事件の直前に出版され

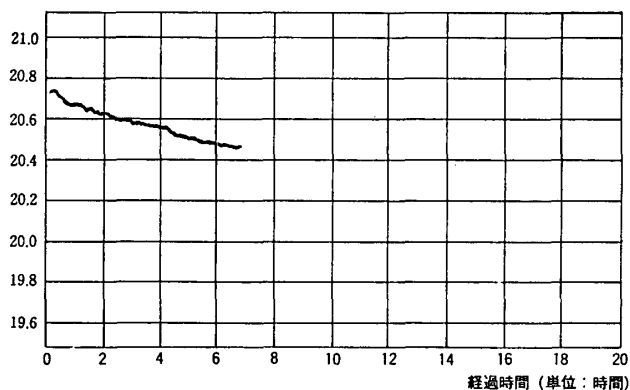
50) 麻原彰晃監修『麻原彰晃のザ・サマディ』株式会社オウム1991年、14~15頁。



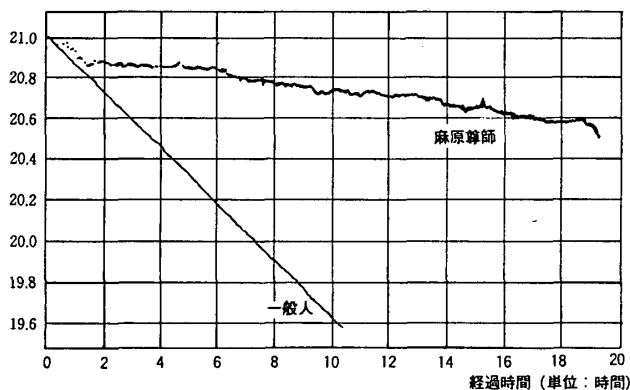
グラフ① ケイマ正大師サマディ室内の酸素濃度の変化
(1988年5月17日、静岡県富士宮市オウム真理教総本部道場)
装置の構成…サマディ室3×3×2.4m、実質内容積20.0㎡



グラフ② 麻原尊師サマディ室内の実測酸素濃度の変化



グラフ③ 無人水槽内の酸素濃度の変化



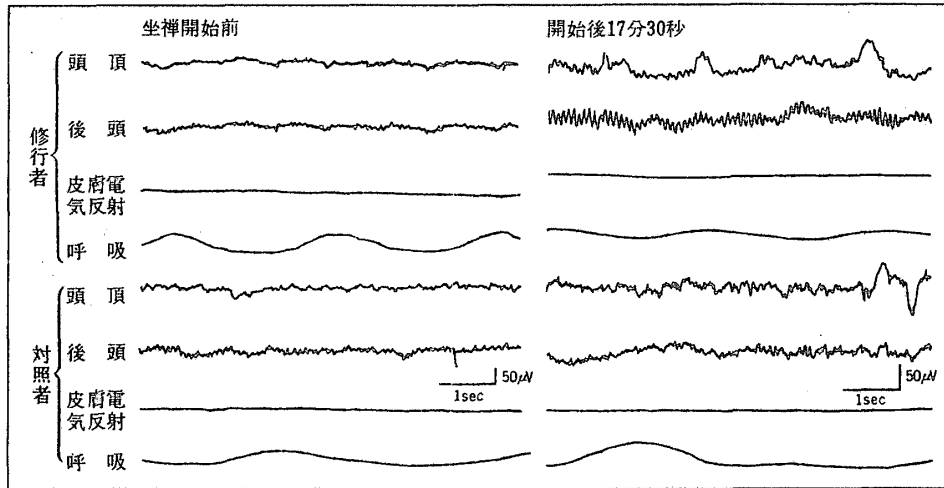
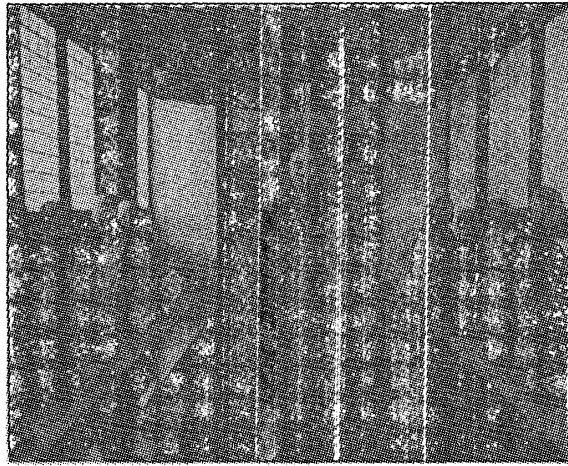
グラフ④ 麻原尊師サマディ室内の実質酸素濃度の変化(仮定)

図9 『TME SAMADHI』, 19頁。

◆ 脳波に見る成就者のステージ

心の状態は脳波によって客観的に知ることが出来る。座禅を例に取ってみよう。

修練を積んだ禅宗の修行者は、半ば開眼して座禅している。にもかかわらず、座禅の進行とともに、脳波には安定したアルファ波が出現してくる。禅定に入って約一分ころからアルファ波が出現し始める。



禅と脳波 座禅の進行につれて、修行者は規則正しいα波が連続するようになる。しかし、非修行者の波形は乱れている。

一方、禅の修練を積んでいない対照者が座禅をしても、安静開眼時のアルファ波に乏しい脳波波形のまま、安定したアルファ波の出現はほとんど見られない。

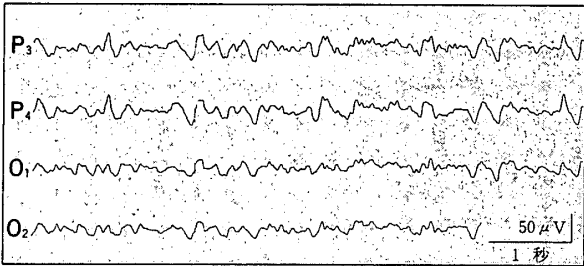
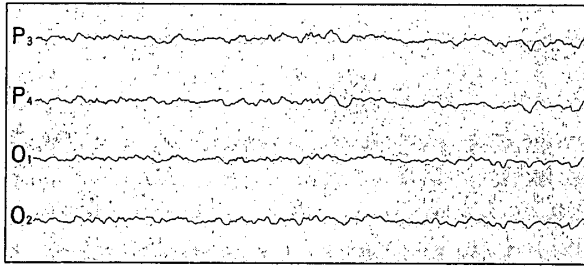
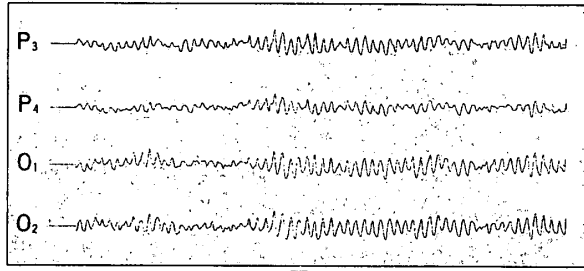
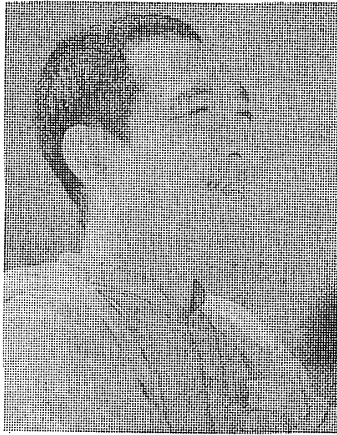
これが禅の高僧の段階であるが、これはオウム真理教においてはラージャ・ヨーガの成就者の上程度から、クンダリーニ・ヨーガの成就者の状態にあたる。

現在、このレベルの修行者はオウム真理教には何百人もいる。つまり一般の人から瞑想の達人と思われる禅の高僧の段階は、仏教の瞑想ステージからするとほんの初歩の段階にすぎない。そこからさらに修行を進め、デルタ波、そして究極的にフラットな状態に至るのである。

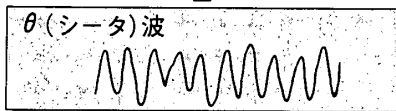
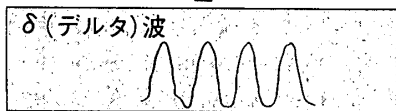
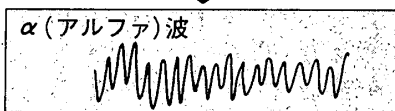
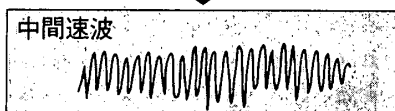
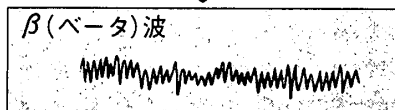
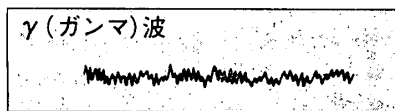
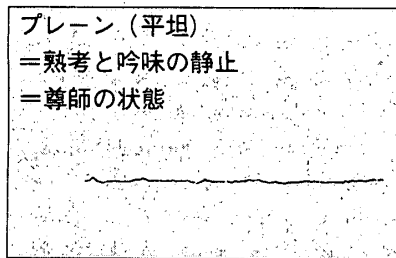
今までの実験の中でも例えば、マハームドラーの成就者である聖者マンジュシュリー・ミトラ智徳成就者(当時)は図に示すとおり、覚醒状態で数十秒でデルタ波に入ることができ、一分かけてアルファ波に入る禅の高僧をはるかにしのいでいることがわかる。

(口理の御最聖 麻原彰晃尊師著
『ボーディサットヴァ・ストラ』より)

図10



正悟師の脳波
 瞑想前にすでにα波があり、瞑想に入ると同時にα波消失、数十秒後にすでにδ波に入っている。なお、これはマンジュシュリー・ミトラ正大師が大乗のヨーガを成就する前、つまり正悟師だった時点での測定結果である。



脳波がゆっくりになるにつれて、心は寂静となり、煩惱の減少とステージの高さを示す。麻原尊師の脳波はフラット、心電図が混入するに至っている。

図11 『アスッタラ・サッチャ』 No. 1

プラズマ人間に変身せよ！

プラズマ兵器から自分を守る唯一の手段

プラズマ兵器に対する別の観点からの対処法として、自らの身体からプラズマを発生するプラズマ人間に変身するという方法がある。何やらSFのような話だが、実はそれほど現実離れした話ではない。オウム真理教の修行者は、なんと身体から電場を発生させることが可能なのだ。その電場をこらえた実験をご紹介します。

今回の実験は、チャクラ（人体に存在する霊的なセンタ）が存在する部位に生じる電場を測定することを目的とした。実験には、FEETという装置が使われた。これは電界効果トランジスタをセンサーとした、電場測定装置である。

被験者は、オウム真理教で修行をしている十二人の修行者。うち五人がクンダリーニー・ヨーガ二人がラージャ・ヨーガの成就をそれぞれ達成している。

グラフ1はクンダリーニー・ヨーガの成就者、ボーディサットヴァ・シリヴァツダ師の実験結果である。ご覧のようにアージュニア・チャクラ（眉間）に意識を集中

しているときに負の電荷を起因とする電場が発生しているのわかる。明らかに精神集中によってチャクラが電氣的な反応を示しているのだ。グラフ2はラージャ・ヨーガの成就者、スワミ・バンドゥラの実験結果である。やはり集中しているときに電場が生じている。

では、全体の実験結果をまとめてみよう。表は、修行ステージと測定された電場の強さの関係を示したものが、修行ステージと電場の強さに見事に相関関係が生じていることがわかる。つまりこれは電場の発生が修行の進捗と密接に関わっていることの証明であり、オウム真理教で指導されているような正しい修行をある程度の期間行えば、だれでも電場を発生させることができるということの証明になるのである。

この電場の発生は、実はアージュニア・チャクラにつながる三本のエネルギー管と関係がある。そしてこの三本のエネルギー管から発されるマイクロ波の周波数がすべて一致したそのとき、プラズマが発生するのである。

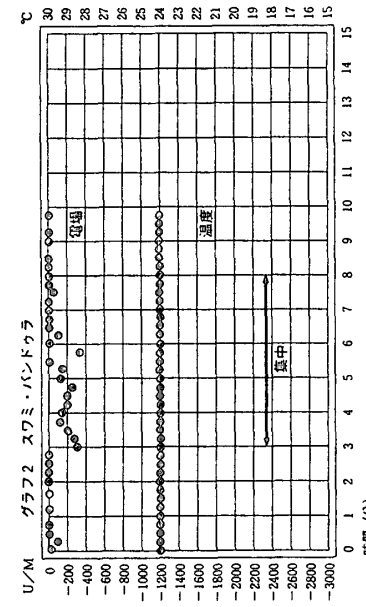
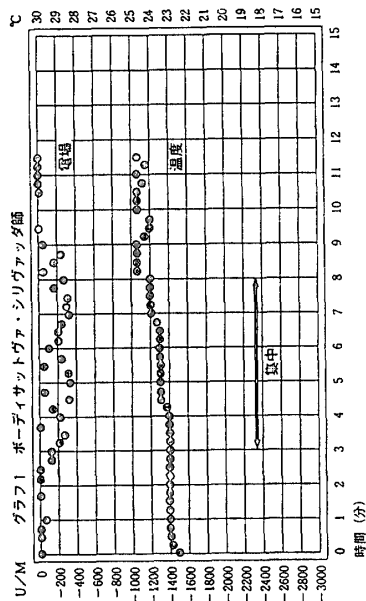
身体からプラズマを発生させることに成功した者に対しては、プラズマ兵器はまったくの無力になる。なぜなら、プラズマを身体から発している人間が外的にプラズ

マの照射を受けた場合、単に自分の発するプラズマが増大する、つまりエネルギー圏になるだけなのだ。

攻撃を受ける度に強くなっていく——オウム真理教の修行者にとっては、恐怖のプラズマ砲も殺兵兵器とはならず、かえってエネルギーの補給源となってしまうということである。

正しい修行によって心を浄化し（心の浄化は三本のエネルギー管の浄化とイコールである）、浄化された管を通して生命エネルギーを上昇させ、アージュニア・チャクラにエネルギーを置き、その周波数を完全に一致させたとき、わたしたちは身体からプラズマを発生し、プラズマ兵器から守られることになる。最終殺兵兵器・プラズマ砲の攻撃の下で生き延びる最後の手段は、正しい修行の実践しかないのである。

なお、もちろんん付け焼き刃の修行で電場やプラズマを発生させることは難しい。生き延びたいと思うなら、できるだけ早いうちから修行を始めておくことが肝要である。



修行者	0	100	200	300	400	500	600	700	800
クンダリーニー・ヨーガの成就者		▲▲	▲▲	▲				▲▲	
ラージャ・ヨーガの成就者		▲		▲					
非成就者	▲▲▲								

図12 麻原彰晃『日出づる国、災い近し』、オウム出版刊、226—228頁。

た『日出づる国、災い近し』は、科学と宗教の種々の統合が試みられており、興味深い部分を多く含んでいる。その中には、「大宇宙真理占星学」のように今後の研究によっては、かなりの可能性を含むものもあるが、「阪神大震災」が、地震兵器によってもたらされたというような論理の飛躍がいたるところにみられる。種々の兵器に関する情報は、かなり正確であるが、その攻撃から免れる方法は、まだ充分確立されていないものが多いのが実情であるにもかかわらず、オウム真理教内では、きわめてプリミティブな方法によって対応し、かつそれが有効であるとされている。

たとえば、プラズマ兵器から身を守る最も有効な方法は、自分が修行によってプラズマを発生するプラズマ人間となることであるとして、(図12)のようなよびかけが表をとまなされて⁵¹⁾いる。脳波の場合とは異なり、きわめてしんぴょう性に乏しいが、科学的粉飾をほどこした例としてとりあげる意義はあるといえよう。

このように、オウム真理教においては、種々の新たな自然科学への試みもなされているが、きわめて困難な課題を短期間に少数の人間で行なおうとしているため、新たな科学のパラダイムを形成するには至っていない。また、種々の実験結果も、条件のコントロールが充分なされておらず、しんぴょう性に欠けるものといわねばならない。

オウム真理教において、最も成功しつつあったものは、科学そのものではなく、科学技術によるサリンのような毒物や、銃の製造であり、それによる教団の武装化であったといえよう。しかしこれは、なんら新たなものの創造ではない。

ところで、これまでは、自然科学について言及してきたが、社会科学においても、いくつかの試みがなされている。麻原は、社会科学の知識がほとんど欠如しているが、理系の大学院卒であるが、左翼運動の活動歴を有する早川には

『市民ユートピアの原理[上]——ルソーから真理へ——』という著書があり、その中で、ルソーの『社会契約論』を取り上げている。

早川は、民主主義社会が終焉する危機があるという認識のもとに、民主主義の原点に立ち返り、民主主義とは何かを問い直し、ルソーが探し求めた市民によるユートピアは、いかなるものかを明らかにしようとしている。そして、オウム真理教の世界観と、ルソーのそれを対比しつつ、オウム真理教の優位を主張しようとしているようにみうけられる。一例をあげると、仏教におけるグルへの帰依と、ルソーの服従の差異を以下のように対比している。オウム真理教で説く内容のルソー説に対する勝れた点をあげているが両者は、やや次元を異にしているとの感を受け、説得力に乏しいといえよう。

服従と帰依の違い

	仏教におけるグルへの帰依	ルソーのいう無制限の服従
1	・自ら望み、喜んで行なう ・すべてに優先する	・好き好んでやる人はいない ・やむをえずしてそうする
2	・放棄するものは自己の煩惱 ・煩惱を捨て意志をつらぬく	・放棄するものは自己の意志 ・煩惱のために意志を捨てる
3	・煩惱の止滅	・他人の煩惱への奉仕
4	・負担を取り除いてもらい、利益を得る	・負担が全部かかり、利益はない

図13 早川紀代秀『市民ユートピアの原理』(上)の73頁。

結論において、人間観・文明観、自由、平等、愛、統治原理、全面譲渡による社会契約、一般意志、充足度を得る方法、欲望、公共の福祉、多数決の前提、自己利益、法、立法者等において、現代社会の現状と、ルソーの理念とオウム真理教の掲げる目標を対比して考察しそれを、(図14)のような表にまとめている。早川は、「社会契約論」の第一編から第四編のうち、第一編と第二編の全文を、取り上げて検討して、次回は、第三編と第四編について検討したいとしているが、そのまま未完に終わっている。

51) 麻原彰晃『日出る国、災い近し』オウム出版 1996年、225～228頁。

現代：ルソー：オウム真理教比較一般

主要ポイント	現 代	ル ソ ー	オウム真理教
人間観・文明観	進歩・発展	墮落・没落	落下・没落
自 由	欲望に従う	欲望を支配	欲望からの解放
平 等	法的には実質的平等 実態は不平等 一般には何でも均一	能力差を認めた上での平等	カルマのもとに平等
愛	見返りを求める 自分の欲望の押しつけ	苦しみの同感から生まれる心	すべての魂の成長を願う心
統 治 原 理	力による支配を正当化 大衆民主主義	社会契約 人民民主主義	徳による統治 神聖社会主義
一 般 意 志	特殊意志に とってかわられる	全人民共通の意志で あり指導原理	グルの意思と合致 一般意志を形成
充足度を得る方法	物に対する欲求を貪る	物に対する欲求を減じる	物質を与える 欲求に転化する
欲 望	肯 定	否 定	減 尽
公 共 の 福 祉	特殊意志による支配	一般意志による実現	一般意志による実現
多数決の前提	軽 視	重 視	重 視
自 己 利 益	欲望充足	自律的自由	愛の実践
法	他人との調整	自分を保護	自己の魂の向上
立 法 者	日本では高級官僚	英知ある偉人	グル、真理勝者

図14 『市民コートピアの原理』（上）の235頁。

これに対し、より広汎な考察をしているのは、京大法学部卒のオウム真理教顧問弁護士の青山吉伸であり、多くの『理想社会』シリーズを出版しているが、その目的について、以下のように述べている。

『理想社会』シリーズの目的

『理想社会』——それは、人類がはるかの昔から夢見てきた平和で豊かで自由で、そして安らぎに満ちた社会。古今東西の夢見る情熱家は、この理想郷を実現するためのプランを、人々の前に高々と誇示し、実行に移そうとしてきた。

しかし、その努力の多くは空しくも水泡に帰した。希望は挫折へと転落し、理想郷への夢は遠のいていく。人々は力なくただ肩を落とすばかり……。これが人類の歴史だった。

そこへ登場した共産主義思想に人々はわき立った。マルクス、エンゲルスによって本格化されたこの科学的な思想こそ、資本主義社会の生み出す非人間的な矛盾を一掃し、人類永年の悲

願を達成できるに違いない！ そんな信仰にも似た熱い思いを人々の胸に甦らせた今世紀最大の思想も、世紀末を迎えた現在、暗礁に乗り上げている。東欧の民主化要求運動、ソ連共産党の解散など、ここ近年立て続けに発生している共産圏諸国における変動は、共産主義の未来に暗い影を投げかけているようにも見える。

なぜか？ なぜ、共産主義はうまくいかなかったのだろうか？ どうして破綻の様相を見せ始めているのか？ それは人類に永遠の自由と幸福をもたらすはずではなかったのか？ 泥棒と乞食のいない豊かな社会、乳と蜜が流れる安らぎの社会が実現されるはずではなかったのか？ それともそれは、やはり大いなる幻想にすぎなかったのだろうか？

だれもが抱くであろうこのような疑問。この疑問に対して、人類の叡智、仏教・ヨーガの真理の視点から明確な解答を指し示す。共産主義思想の長所は進んで学び、その不足点、失敗の

原因を明らかにし、真理の法則で補っていく。精神と物質、宇宙のすべてを包含する真理の法則によって、すべての矛盾を科学的に解決していく。そして、目前に迫る新世紀を控えて、真の理想社会のヴィジョンを鮮明に呈示する。これが、この『理想社会』シリーズの目的である。

以上のような目的を掲げて、『理想社会』は、「共産党宣言から真理へ」という副題がつけられている。『理想社会②』の副題は「空想から科学へ、そして真理の世界へ[上]——唯物論の崩壊——」となっている。この後編とみなすべきものが『理想社会④』で、「空想から科学へ、そして真理の世界へ[下]——真の理想社会への方向性を探る」という副題になっている。さらに、『理想社会』の⑥から⑧にかけては、それぞれ、「資本論から真理への旅立ち」の第一回から第三回までが含まれた内容となっている。

このように、『共産党宣言』、『空想から科学へ』、『資本論』というようなマルクス主義の代表的古典を対象とし、それがいかなる理由により、理想社会を形成することに成功しなかったかの要因を分析し、かつそれに代わるものとして、オウム真理教によって提示された世界観、社会観を提示している。さらに、共産党のような左翼組織に入っていた人物の転向体験を『理想社会』シリーズに掲載しており、そのような運動に入りながら挫折した人物をオウム真理教へ入信させようとする意図がみうけられる。これらの内容をみると、自然科学の場合と同様、着想自体にはみるべきものがあるが、論理が飛躍しており、適切な媒介項がない点で共通しており、科学のレベルに達していない点でも同様といえよう。

7. 結びに代えて

オウム真理教は、麻原彰晃という一定のカリスマ性を有する教祖によって形成され、発展したヒンドゥー・ヨーガをその主たる修行体系とし、神秘体験を重要な構成要素とする新新宗教として位置づけられる。教祖と教団の軌跡をたどると、ヨーガの修行グループとして出発し、しだいに新宗教教団へと変化し、発展した。こ

こまでは、他の新宗教においてみられるケースとそれほど大きな差異はない。しかし、時をへるにしたがって、しだいに内閉的となりかつ教団外部との対決姿勢を強めるにいたり、ついには、国家を相手にしてまでクー・デタを企てるに至った。

このような変化がいかなる要因によって生じたかを考察するにあたって、まず、オウム真理教の教義をみると、多くの宗教の混淆であるが、仏教一つをとってみても相当該博な知識にうらづけられており、その知識のレベルは、新宗教の教祖としては、上位に位置づけられる。正統的な仏教解釈からは、ずれている部分が少なくないが、本来オウム真理教は、新宗教であるから差異があるのは当然であり、その点は根底的な問題とはならない。その仏教とヒンドゥー・ヨーガの教理の接合を、永沢哲は、相当高く評価しており、ある種のニヒリズムに陥らなかったなら、当教団は、かなりの成功をおさめた可能性があったものとみなしている。永沢は、麻原の宗教世界をかなり好意的、内在的に理解しようとしてつとめているが、筆者は、麻原は初期から以下の身辺の信者の証言のような二面性をもった人物であったと考えている。「麻原は二通りの顔を持つ。カリスマ性のある教祖の顔と、…刑事事件を平気で起こす顔。完全に使い分けており、よほどの側近でないとなれば彼の素性は知らない⁵²⁾。」

この証言からも、教理の展開の失敗が主たる要因となって種々の犯罪を犯すに至ったとみなすことには無理がある。ついで、オウム真理教の組織と活動の形態をみると、前記のごとくヨーガや種々の現世利益でまず在家信者とし、ついで、一定のステージ以上に達するには在家では困難であるとして、出家を勧めるケースが多い。出家修行は、きわめてきびしいうえに、後期になるほど、宗教目的以外のワークに従事せざるを得ない場合が多くなった。なお、組織の特色としては、横のつながりがなく、グルである麻原と一対一でつながるという形態であり、

52) 毎日新聞社会部『冥い祈り——麻原彰晃と使徒たち——』毎日新聞社1995年、60頁。

出家者同士の間でも序列がはっきりしており、コンミュンとは異なっている。そして、組織形態としては、高度なものではなく、統制も充分とれていず、教団幹部も社会的経験の乏しい者が多く、全体的に未成熟な教団であったといえよう。

ついで、オウム真理教を科学と宗教の関係から考察すると、宗教の正しさを科学によって実証しようという志向がみうけられるが、これは、麻原が影響を受けた佐保田鶴治が「ヨーガは宗教の一種である」⁵³⁾ としているような見解とは差異がある。宗教と科学は、部分的には一致する部分もあるが、その機能は基本的に異なっておりとくに、近年その差異は拡大傾向にあるといえよう。

たしかに、近代科学もしくは近代合理主義が行き詰り、いくたの弊害をもたらしている側面があることは事実であるが、それに代わる新たな枠組を構築することは、きわめて困難な課題であり、人類全体が総力をあげて長期的に取りくむことによって初めて成功する可能性が生じてくる程の難事なのである。それを、一万人程度の集団内で行なうと本気で考えていたとしたら、麻原と幹部の考えは妄想であるといわれてもいたしかたないといえよう。

しかし、ほとんどすべての教祖は、誇大妄想的であり、大多数の宗教団体は「幻想の共同体」であるが故に、麻原や幹部が誇大妄想的であり、オウム真理教が、人類救済を担う聖なる共同体

であると考えたのはなんら不思議ではなく、むしろ宗教教団においては数多くみられる現象といえよう。

さらに、人類最終戦争があり、自分たちのみが生き残り、新たな世界を作る聖なる使命を有しているという考えを持つ教団も多数みうけられる。しかし、オウム真理教の場合は、そのような予言の自己実現のために、国家を相手にして、クー・デタを企て、かつそのために本格的な準備をしていた点が特異なのである。小規模の戦闘を企てた教団はそう珍しくないが、オウム真理教程大規模なものは、他に類をみないといえよう。

この事件に関連した公判等においても、教団の変質の原因は充分には明らかにされていないように思われる。この問題に関しては、毎日新聞社会部がいくつか示唆に富む見解を示している⁵⁴⁾。

オウム真理教事件をみると、きわめて正確な情報ならびに巧みな操作と、不正確な情報と稚拙な行動とが混在している。あと数ヶ月放置していたら、多くの人が死亡し、日本は大混乱に陥ったものと思われる。オウム真理教事件は、個人が変われば社会が変わるというニューエイジの中核思想の影響をも受けた団体は、高度の機能を持つ組織が関与したならば、利用しやすかつ抵抗力の弱いものであるという可能性をも示したという見方もできよう⁵⁵⁾。

53) 佐保田鶴治『ヨーガの宗教理念』平河出版社 1995年、204頁。

54) 毎日新聞社会部『前掲書』193頁、213-214頁。

55) RACHEL STORM, IN SEARCH OF HEAVEN ON EARTH, Bloomsbury Publishing, Ltd. 1991.